
こんな妹がいたら人生捗るよね

白河恵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こんな妹がいたら人生捗るよね

【Nコード】

N9410W

【作者名】

白河恵

【あらすじ】

運悪く兄妹同士で好き合ってしまう。しかしその関係にあるかぎり全ては否定される。それは倫理的にも生物学的にも許されるものではない。そこに射すたった一筋の光明。実は血の繋がりなんてなかった。すなわち義妹。それは報われないはずだった愛に対する救いである。そのようなロマンあふれる設定を僕の個人的都合でなかったことにしているだろうか。（本編より抜粋）

あらすじ的なあらすじはないけど大体こんな感じ。

ただし実妹に限る

冬はつとめて、なんて有名な文句があるけれど、実際のところは彼女だつて本気で言っていたわけではないだろう。人が好まないことをあえて褒めるつて、その方がおしゃれだし？みたいなのもりで言ったに違いない。温暖化の騒がれる昨今で、しかも室内の防寒対策だつて当時とは比較にならないほど発達していても、ベッドから出るのはかなりの精神力を要してしまうのだから、少なくともまともな感性でそんなことを言える人はいないだろう。

そんな冬の早朝に僕は目覚めた。普段ならそれこそ、布団にもぐつていてさえも肌寒さを感じ、外に出ること恐怖さえ覚えてしまうのだけれど、今日に限つては何故だかすごく温かい。というか生ぬるいのは、何か僕に抱きついていてからだった。覚醒しきつていない頭で、特に何の気もなしに布団をめくつてみると、そこには妹がいた。腰あたりで切りそろえられた長い黒髪がさらさらと、僕の体にまとわっているのはいとよろし、といったところだ。そのきれいな黒髪につい触れてしまいたくなるのは兄としては当然であるけれど、抱きつかれて、その上パジャマがほとんどはだけてしまつて下着見放題な現状で、それ以上何かしらのアクションを起こすのは倫理的に躊躇われてしまう。

だけど、よく考えてみるといい。彼女は現在小学五年生だけど、一緒に布団で寝てくれるくらいには慕われている。けれどそれもいつまで続くのか全く予想できない。そろそろ反抗期を迎えてもおかしくない時期なのだから。一年を待つことなく、いわれのない、必要以上の嫌悪感を持たれてしまつても全く不思議ではないのだ。けれど、この絶好の機会に妹の髪に触れる程度のことを躊躇つてはいけけないのだ。そんなことでは、今後の人生で何か重大な選択を迫られた時でさえ、自分の意思に沿つた決断など出来ようもない。流されて流された結果、面白みも達成感もない人生を終えるに違い

ないのだ。だからこそ僕は勇気を持った決断をしなければいけない。判断を下すにおいて、現状における問題は二つある。まず、妹の髪の毛を触って、それを妹に気付かれてしまったては、反抗期を早めることになるかもしれない。そしてもう一つは、妹にこれ以上触れてしまつて僕自身の抑制が利くのかどうかだ。後者については全力を出せばなんとかなるはずだ。しかし前者についていえば不確定要素が多すぎて、僕の努力とは全く無関係に悲劇が起きかねない。悩めば悩むほど、不確定要素は悪い方に傾き続ける。分かつていても、僕は動けない。考える時間さえもつたいたないので、妹の寝顔を眺める。せめてそれくらいはしておかないと一生後悔する。つていうか、寝顔かわいすぎるだろ。普段生意気なところもあるけどそれでも可愛いのに、無防備な姿さらしてたら更に可愛い。結局あれだよ、寝ぼけてた振りでもしてごまかしたら何とでも言い訳できるよ。

という訳で僕はむにやむにやと、寝言のなり損ないみたいに動いている妹の口元に手を近付けた。その時僕は本来的な意味で全く何も意図しておらず、完全な無意識だった。何も考えずに、半開きになった妹の口に指を突っ込んだ。くちゅくちゅされてる。すごく幸せだ。ここであらぬ誤解を受けないために、いくつか弁解しておく必要があるだろう。僕は一般的に言うロリコンの素養はもちろんのこと、リアル妹萌えのような希有な属性も有してはいない。では何故このようなある種変態的ともいえる行為にいそしんでいるのか。それはひとえに可愛いから。それに尽きる。意図せずとも、勝手に体がそう動いてしまったのだ。血縁など関係なく、そもそも生物として根源的にある庇護欲的な何かをそそられたにすぎない。仮にこのようなシチュエーションに放り込まれたとして、何も動かない兄などどこにも存在しないに違いない。

ところで、本能的に動いてしまったせいで髪に触れる、という本来の目的を忘れてしまつていたので、ついでに済ませておきたい。もちろん突っ込んだ指はそのままだね。口元にかかる髪をすくい上げてみるけれど、それはあまりに作り物じみていて、指先で触れる

だけで傷ついてしまうのではないか、そう思えるほど繊細だ。指は未だにくちゆくちゆされていて、ふやけてしまいそう。

「っていうかもしかして、起きてんじゃないよな」

あまりに艶めかしく動く唇を感じ、僕は些細ながらも、ことによつては重大な疑問を口にした。すると彼女は薄目を開け、口をゆつくりと開いた。舌でからめとられている指から、唾液が生々しく糸を引いている。ただただエロい。そして彼女は一言いった。

「とつくに起きてるよ」

嘘だろ。一瞬で体中の毛穴が開く感覚を味わった。全身がチクチクする。これって結構痛みも感じるんだよね。

「いや、ごめんあれだよ。穴があつたから入れたかつたみたいな」

理解できない言い訳に我ながらあきれてしまったがしかし、今の状況で何をどうすれば何を弁解出来るというのだ。妹は指を舐め続けながら器用に話します。

「そのままで、声をあげないでね」

指の入ったままで、よくもそこまではつきりと喋れるものだ。多少訛ったほうがそれはそれで趣深いのだけれど。

「絶対だよ。もしこんな所お姉ちゃんに見られたら大変なことになっちゃうよ。うわ、気味の悪いことにお兄ちゃんの顔がにやけてきてるよ。どう見ても変態なんだよ」

はつきり話すためとはいえ発音のたびに強く噛まれてしまい激痛が走る。(特にサ行夕行がやばい)しかも妹の脅しにより作られた状況的に声を上げることもできない。無論それは我慢の対象ではないのだけれど、そろそろ姉の出番が来てしまう。早めに切り上げなければ殺されてしまう。

「ところで珍しいね。一緒の布団で寝てるなんて。怖い夢でも見たの?」

兄妹仲はそれなりに良好であると自負しているが、寢床をともにすることなど久しくなかった。(半年ぶりくらいかな)すると彼女は可愛らしく首をかしげた。

「たまには、ね」

そうだよね、理由なんていらないよね。

兄妹なんだから、一緒に寝たり、触れ合うくらいごく普通だよね!

「じゃね」

そう言っただけで彼女は部屋を出て行った。残された僕は唾液でふやけてしまった指を眺めていた。しばらくしてから朝食のためにダイニングへと向かった。べたべたの指はしっかりと口でぬぐっておいた。姉にばねるとまずいからね!

義姉って素敵な響きだね

ダイニングに着くと、朝食はすでに用意されていた。はちみつたつぷりのトーストにベーコンエッグと、一見するとオーソドックスなものではあるが、その量が尋常ではない。おそらく僕を太らせて食べてしまいたいのだ。虐待に近い形で大量の食事を強要させられていた僕はいつの間にか胃袋が大きくなってしまったらしい。といっても、いくらでも食べられるようにはなっただけれど、その分燃費が悪くなってしまったようだ。いくら食べても、いつまでたってもやせたままで、縦にも横にも成長の兆しがまるでない。

「おはよう。今朝は早いね」

朝食を作り終わって一息ついたのだろう姉が満面の作り笑顔を浮かべながらそう言った。目が全く笑っていない。

「目が覚めたからね。ところで、今日はやけによそよそしいね」

姉は普段であれば粘っこいほどに馴れ馴れしく突っかかってくるのだけれど今日の態度は明らかにおかしい。普通過ぎて違和感がない。特になんかした覚えなんてないんだけどな。

「あの子に起こしてもらおう方がいいの？」

僕はまたしても全身の毛穴が開ききるのを自覚した。一瞬で凄まじい量の汗が流れおちる。いや別にさ、一緒の布団で寝てたのは確かだけれど、それだからってやましい事があったわけじゃないし。嘘だけど。大体妹に起こされた程度で、そこまで険のある視線を向け

られる覚えなんてないんだよね。まあ、ありりだけど。というかさ、いくら姉だって千里眼持つてるわけじゃないんだから、あそこで起きたことの全容なんて把握できてるはずがないじゃん。多分。

「違うよ。妹に起こされるのは珍しいからね。だから目がさめちゃったんだよ。修学旅行でつい早く目が覚めちゃうとかそんな感じ。普段と違うことをされると覚醒しやすいんだと思うよ。お姉ちゃんに起こされても起きないっていうのは慣れと甘えの結果だよ」

僕はあくまでクールに、そう言い訳したけれど、彼女がすべて把握しているのだとすればすべては無意味。むしろ嘘をついた僕はひどい罰を受けるに違いない。姉はどこまで知っているのだろう。知られているのだとすれば、ここに並んでいる料理はすべて僕を処理するための改変を受け、非人道的な何かに変貌しているのだろう。ベーコンエッグの目玉が開いて闇のゲームに招待されてしまうのかもしれないし、バターとはちみつたっぷりのトーストが文字通りのハニートラップとして赤ジャケットに下半身裸の変態をよびよせ、僕を襲わせるのかもしれない。そして夕食には惨殺された僕が並ぶのだろう。カニバリズム肯定派の姉による豪勢な肉料理が姉とその他の創造物に食されるのだろう。姉は料理に関してはかなりの腕前を誇っているので食べる部分なんてほとんどないような僕でさえもおいしく調理されてしまうのだ。もしかするとある程度僕をいたぶつてから殺すかもしれないから、今日の夕食には出ないのかもしれない。どちらにせよ僕は殺されてしまうのだ。「君はどんな姿になっても可愛いね。これからは精神的にも物理的にも一緒になれるね」などと平気で言ってしまうような人種であることは、過去の体験から証明済みだから、いまさら彼女に慈悲の精神を求めるのは無駄しかない。二回くらいそのような目に遭ったけれど、そのどちらも懇願すればするほど彼女の表情は嗜虐的なものになっていったのだ。そこまでいくと深すぎる愛情と呼ぶにはあまりに重く、極端すぎる

執着とでも表現するのが適当だ。だからといって、僕は彼女を嫌いにならないし、彼女も僕を嫌うことはないのだろう。そうするのが彼女で、そうされるのが僕であると脳みその裏側に刻み込まれているから。まあ、調理するんだったらなるべく痛くしないでほしいけどね。

「別にさ、君のこと責めてるわけじゃないんだよ？ただ少し残念に思っただっていうのかな。確かに君たちは兄妹で、あの程度はスキンスリップの一環なのかもしれない。だからって私にはばれないように隠すことないんじゃないかな」

「あのお」

「何？どこまで知ってるのかっていう質問だったら、全部、としか言えないよ」

僕は姉による血抜きが済むまでもなく血の気が引いてしまった。つていうくだらない冗談が浮かぶくらいには動転していた。

「まじでごめんなさい。言い訳をします。あれは出来ごころで会って決して浮気心とかそんなんじゃないから。ところでなんでわかったの？」

「君から、あの雌ガキの体液のにおいがしたからね」

いや、妹の唾液はそんな不快な臭いもしなかったし、しかもちゃんとふき取ったはずだろう。でもまあ、味で言うとちよつと甘かったような気もするけど。とりあえず指先のおいをかいでみるが、やはり全くの無臭だ。しまった、と思っただけれどその時にはもう遅かった。こちらを眺めニヤニヤしている姉を見てようやく気付いた。

「もしかして、鎌かけられた？」

「実はそうなんだ。とりあえず、その指だね」

「いや違うよ、多分想像してるのとは違うよ。指を舐めてもらっただけだから」

「ああ、そんなことしてたんだ。私はあの子が君の部屋に入るところしか見てないからね。知らなかったよ」

「今から謝っても、もう遅いかな？」

「残念ながら」

ひどい悶着があった後、僕はやっとの思いで朝食を食べ終えた。幸いというべきか、朝食はいつも通りとてもおいしかった。トーストの焼き色一つ見ても丁寧に作ってあるのが良く分かる、いつも通りに愛情のこもったものだった。姉は僕が食べ終わる前に仕事に出て行ってしまったから、それに対するお礼は言えなかった。僕は部屋に戻って出かける準備をしようと思っただけけれど、その途中でひどい睡魔に襲われた。付け替えられた指がひりひりしたけれど、それさえ気にならない程の急激な眠気だった。

そろそろ方向修正しないと収拾がつかなくなる

僕が目覚めると夕方になっていた。太陽はほとんど沈みかけているし、季節がらこの時間帯はとて冷ええる。そのせいで僕の体は凍えて震えが止まらない。ところで、朝からの記憶は一切抜け落ちて今この状況にあるのだけれど、それはおそらく僕が僅かも覚醒しなかったことが原因だろう。それにしても、よくもまあこんな時間まで眠りこけていたものだ。これから生活リズムの修正が大変だ。何て、ひとしきりの現実逃避が終わったところで確認しよう。ここは何処だ。どこかの家屋内というにはあまりに殺風景だ。床はコンクリートがむき出しで、窓ガラスだってはめられていない。これはもう廃墟といってもいいんじゃないかな。そんな寂びれた一室に僕はおそらく監禁されている。この場のことを詳しく知るうにも、あたりはあまりに薄暗く端まで見通せない。見た感じ広さは学校の教室よりは少し狭いくらいだろうか。少なくとも一般的に使用される部屋にしては広すぎるし飾り気がなさすぎるから、何かの施設であることは間違いない。それにしてもここが何処だか全く分からない。周りもさっきのこと以上は何にも分からないし。ってなんだか思考が堂々巡りをしていて何の解決にも近づいていない。それに頭に靄がかかったみたいにはつきりしない。寒さで血が巡らないのか、そもそも巡る血さええないのか。吐く息が凍るし、その上、手首足首から先が4つともなくなっているのだから、そんなの論じるまでもない。どちらも原因だ。この残酷な仕打ちからすると犯人は限られてくる。というか一人しか思いつかない。なんか今回は仕打ちがえげつない気がする。今の僕はいつ死んでもおかしくない。やばいよどうしよう。死にたくないよ。なんてね。

「姉ちゃん、寒いんだけど」

どうせどこかで見張ってるんだろう。さすがにこのままだと失血死が先か凍死が先か。どの道近いうちに死んでしまう。姉は不死身が存在しないってことが分からないのだろうか。それくらい社会の常識だろう。それにしても返事が遅い。いつもならはい、ネタばらし、って感じで待ちきれない様子で助けてくれるのに。焦らし、なんていう余計な事を覚えてしまったのだろうか。そんなこととしても、僕の意識はぎりぎり保たれている状態だし、そのぎりぎりだってあとどれほど持つか分からない。多分意識が途切れると死んじゃうねっていうか、なんでこんなひどい目に遭わないといけないんだよ。妹といちゃついたらなんて言う理由で死ぬのは理不尽すぎる。それにしても、なかなか意識が途切れない。まあ死なないからいいんだけど。寒さのせいで血管が絞られているのか、出血はほとんどおさまっている。といっても失血は生命活動の維持に支障をきたす程度はしているらしい。今なんてほとんど夢うつつだ。僕の場合見えるのはお花畑ではなく三途の川だっていうのが何となくリアルだ。多分死んでも救いのある世界にはいけないだろうね。僕は暇つぶしに河を何往復かしたけれど、一向に姉が助けに来る気配はない。だんだん川岸が遠ざかっているのはまずい気がする。気力を振り絞って体に意識を集中してみたけれど、現実的な感覚はもう残されていないみたいだ。もうだめだと視界がブラックアウト、人生にドロップアウトしかけたその時、姉はようやくやくやってきた。

「そろそろ帰りましょう」

姉の声が聞こえて安心したかったけれど、僕は却って気を張り詰める。ここで気を抜いたらすべて終わってしまう。何て言う放置プレイ、やっぱりあんたかよぶねえな、さすがにシャレにならねえよと回らない頭でさえ言いたいことはたくさん浮かんできたけれど、舌が動かない。

「危なかったね。君が死んで、私の生きる希望が失われてしまうところだった」

どの口がそんなことを、と言いたかったけれど、この口はピクリとも動かない。意識も限界だ。これ以上は無理。気を失う瞬間に近付いてきた姉の瞳に涙が浮かんでいるのが見えた、様な気がしたけれどよくわからない。視界はほとんど真っ白だったから、ブラックアウトならぬホワイトアウト。吹雪く雪原のように何も無い世界で、僕は静かに目を閉じた。

まだ大丈夫

僕はいつも通りの朝に目覚めた。とても肌寒さを感じる。期待をせずに布団をめぐってみるけど、やはり妹はいなかった。残念だけど、妹には僕の日常に介入できるだけの権利がなかったのだろう。昨日から寝すぎたせいだろうけど、頭がぼうつとする。僕は二度寝しようとしたけれど、それはどうやら許されないようだ。部屋の扉が開き、姉が顔をのぞかせる。布団に潜り込もうとした瞬間に目があってしまった。

「君は寝るのが大好きなのね。お姉ちゃんどっちが好きなのかな？」

もちろん睡眠の方が大事だから返事はしない。すると彼女は布団の中に潜り込んできた。

「分かってるよ。君は恥ずかしがり屋だから、素直に答えるのが嫌なんだね。何も言わなくてもいいから、甘えていいよ」

そう言うと、自らの胸を使い僕を窒息させようとする。容赦なく呼吸器をふさいでくるので死ぬほど苦しい。でも気持ちいいのであるがままでいる。意識が飛ぶ直前までそうされていたのだけれど、絶妙なタイミングで僕は解放された。一気に流れ込んでくる空気に僕は生きていることを実感させられた。朝からなかなかハードな体験をしたせいで血圧が上がったのだろう。二度寝しようにもできなくなってしまったので僕はさっさとダイニングに向かった。

ダイニングに並べられた豪華な料理の数々を見て絶句した。刺身にすぎ焼き、肉まんに燻製肉にハンバーグにステーキと和洋中間わず大量に並んでいる。極めつけに妹の頭部がそのままきれいに飾ら

れている。これらの肉料理はすべて人肉製だ。妹は調理されてしまったらしい。妹はこちらを恨めしげに睨みつけたけれど、僕に一体どうしろというのだ。さすがに妹を食べる気にはなれなかった。僕はまわれ右して部屋に戻ろうとする。ダイニングの扉の前に姉が仁王立ちしている。彼女はさも楽しげに言った。

「食べなさい」

僕はそれに従うしかなかった。僕は反抗出来るように作られていないのだから、しょうがない。僕は座り直すとまず刺身に手をつけただ。見た目で言うところが一番ましなのだ。純粹に妹の肉だけを食べる方が、まだ吐き気が抑えられる。焼かれたりミンチにされた上他の食材とぐちゃぐちゃに混ぜってしまった妹を食べるのは吐瀉物でも見ている気分になってしまふ。一口かじったのだけれど、相変わらず違和感のない味だ。例え人肉と分かって食べても、それを疑ってしまうくらいに。かといって牛とも豚とも鶏ともつかない味だから、知らなければ何の肉だろうと気にはなるだろう。この部位は脂身がほとんどないから味わいとしては淡泊だけど、わざわざ醤油につけて食べると僅かな臭みが消え、ほのかな甘みだけが口に広がる。正直にいつてしまふとおいしい。これが妹なのだと考えると食材そのものに対する愛着もわいてしまふ。だけど、さすがにこれ以上は無理だ。僕は立ちあがり部屋に戻ろうとした。

「どうしたの？口に合わなかった？」

そんなことは決してなかった。姉の料理の腕前は広く人々のために生かされるべきだと僕は考えているのだけれど。それが不特定多数に振舞われることはあり得ない。姉が言うには、料理なんて言うのは結局、手間をかけた分だけそれが味につながるのだから、僕以外の相手にそれほどまで手間をかけた料理など作る気はないらしい。

それはまあ、姉の僕以外に対する興味のなさを見てもしょうがない事なのだと思えた。といつても、姉ほどのレベルに達すればある程度の水準の料理は、手間をかけるまでもなく作れてしまうみたいだ。僕は一度、姉の料理を自慢したくて、家に友人を招待したことがあるのだけれど、友人に出されたのは僕に作られた料理の失敗作、とさえ言えない残飯だった。スープの灰汁と野菜の切れ端の混合物、出汁をとり終わった後の肉類などなど。見た目は適当につくろってあったけれど、それらは正真正銘の残飯だ。といつても姉に悪気があったわけではなく、友人には残飯が適当だと、本気で考えていたようである。友人のおいしかったです、という台詞には思わず涙しそうになったものだけれど、あとで謝りがてら聞いてみると本当においしかったらしい。そもそも残飯であったことにさえ気付いていないようだった。その当時は友人の味覚に問題があるのだときめてかかっていたけれど、そうでないと分かったのはつい最近だ。ある時、下の妹に提供されていた残飯を好奇心からつまみ食いしてみたのだけれど、決してまずいとは言えなかった。廃棄処分前提とはいえ、もとは僕のために用意された高級食材の一部なのだから、当然といえば当然の話だ。

「まあおいしいんだけどさ、妹はいつごろもとに戻すの？」

前は妹を半年は復元させなかった。そして復元されて早々にまたこうして調理されてしまったのだから、さすがにかわいそうになつてくる。

「今回は調子に乗ったみたいだから五年は許さないよ」

それは長すぎるだろう。容赦がないという以前に理不尽でしかない。ところで、復元それ自体は妹自身の異常に発達した恒常性によ

り即時に行われるのだけれど、姉の手にかかればその程度の能力は簡単に封じてしまえる。例えば調理や消化という形で。かく言う僕自身、殺されても死なない人間であるが、死ぬときは死ぬのだから決して不死身という訳ではない。とはいえ脳みそさえ無事であれば例え心臓を叩き潰されようと、姉のおかげで一晩もしないうちに元通になるのだから、人間とはいえ半分以上は化け物と同等である。その点でいうと妹は姉の創造上の都合から、今のように頭に血が巡らずとも一応生きている完全な化け物だ。

「たった昨日のことで、五年はないよ」

そもそも、あれは僕にも非はあつたはずだ。 とうか責任所在は妹と僕で1対9くらいじゃないかな。ほとんど僕の責任であるといつて差し支えない。地球を滅ぼそうとした前回で半年なのだから、五年というペナルティがいかにも不相応なものかわかるだろう。

「大体僕も罰を受けたんだから妹にはおとがめなしでいいんじゃない？」

「言っておくけど君は罰なんて受けてないよ。受けるようなこともしていない。問題は、あの子は君を殺そうとしたこと。君を死なせようとした罪は地獄墮ちでも償えない。だけど妹ちゃんが死ぬば君は悲しくて寂しくて死にたくなるでしょう。 だから五年。妥協して五年なの」

「いつも僕を殺してる人のセリフじゃないだろ。それに妹は、いつ僕を殺そうとしたの？」

「昨日あなたを眠らせて、わざわざ私の目の届かないところまで飛ばして、直接殺せないから失血死を狙って両手首を切り落としたの。」

この人は何を言っているのだ。嘘に決まっている。冗談にしては超クールだぜ。脈絡がない。妹が人殺しを考えるなんて、姉ちゃんが僕を嫌いになるくらいあり得ない。まあ、姉ちゃんだって、たまには冗談を言いたくなることもあるのだろう。それにしてもまったく面白くない。僕が死にかけた責任を妹に押し付けるなんて、姉としてどうかしている。といっても姉と妹は僕にとつての姉と妹だけれど、姉にとつて妹は妹ではないし、妹にとつて姉は姉ではない。だから別に家族を貶めるだとかそんなレベルの話で僕は憤ったりはしない。ただ姉は人として、年上として結構きつい事をしている気がする。もうすこし大人だと思っていたけれど、結構子供じみた部分もあるんだね。それはそれで新発見、って感じがしてちよつと嬉しかったり。大体さ、嘘をつくにしても信憑性がまるでないんだよね。まず、僕は妹に何かされた覚えなんてないんだから。いくら眠りこけていたからって、手首足首を切り落とされて気付かないはずがないんだし。でも実際僕は目覚めるまでそれに気が付かなかった。昨日の朝、妹がベッドに潜り込んでいたのは僕に何か仕掛けるためだった。例えば遅効性の昏睡薬を仕込まれていた、なんてね。可能性としてあり得るといっただけで疑うのは馬鹿みたいだ。だとすれば世界が三秒後に滅びる可能性だってなくもないんだからさ。そんなくだらない可能性を心配したら、まともに生きていけないよ。そもそも、誰よりも大事にしている妹に殺意を抱かれる理由がない。前回のことといい、長い間僕のせいで殺されっぱなしになってたり。だいたい、妹が他人の体を切断するなんていう残酷な真似できるわけがない。普段から経験値稼ぎと称して人を殺しまわっている彼女が。

なんか結構証拠が出そろってきたような気もするけど。だとすれば余計にたちが悪い。それっぽい理由を根拠にして妹に責任をなすりつけるなんて。妹は本気で世界征服を企めるくらい純粹な子供だ。

例え自分の傷害になると分かっても、僕を死なせようなどと、俗悪な考えは抱けるはずがない。

次から元通り萌え萌えに（予定）

「お姉ちゃん、いい加減に本当のこと話してくれないと、さすがに怒るよ」

僕がそう言うと、姉はこちらを見た。その目は僕を憐れんでいて、僕をかわいそうだと思っていた。どうしてそんな目をするのだろう。それだと僕が間違っているみたいだ。もっと別の反応があるはずじゃないかな。僕がこれだけいっしょうけんめいに、真実を求めているのに、返ってきたのは何を言っても無駄なのだ、あなたはどうかしている、とでも言いたげな態度。そんなのおかしい。だけど、こんな態度の姉が僕を騙しているとは到底思えない。姉はふざけて僕を騙すことはあっても、まじめに僕を陥れようなどとはおそらく考えもしないだろう。姉が僕を騙すのだとすればその目的はあくまで楽しむためであって、決して姉自身がこんなつらそうな態度をとるわけがないのだ。だからもしかすると、姉のいつていることは本当なのかもしれない。

「仮に、妹が僕の手足を切りおとして、失血させようとしたとしても、だとしても、実際に僕は死んでなんかいない。つまり、妹には殺意がなかったってことじゃないかな。ほんのいたずら半分で行ったことなんじゃないかな。それにさ、妹はまだ十歳なんだよ」

「それは何に対する言い訳なの？」

姉がもはやあきれ返っているのが分かる。だけど、僕は妹が僕を殺そうとするわけがないと信じている。仮にその未遂行為を行ったとしても、なにか納得できる理由があるに決まっているのだ。だから妹は絶対にいい子だ。

「僕は間違っていない」

それは僕の心からの宣言でしかなかったけれど、姉にとってそれは決別を意味していたことを僕は知らなかった。

「妹がそろそろ壊れかけてるってことくらい、さすがに分かるはずじゃない？私の作り物で成功品はあなたただだって、何度もいったじゃない。あなたがそう望むのなら、全く新しい新品だって作ってあげられる。といつてもあくまでこうなることが前提のつくりものにしかならないけれど。実際私は分かっていたの。あの時あなたの望みをかなえた時点で、もしかするとこうなるんじゃないのかってけれど私には、あなたが私の完成品としての人生だけを送ることが耐えられなかった。どう考えたって、結局は私のエゴの結果で、あなたは不幸にしかねないの」

やめてよ。姉ちゃんは何も悪くないから。悪いのは全部僕だから認めるよ。妹は僕を殺そうとした。妹は完全な不良品だ。僕だってそうだ。お姉ちゃんを泣かせてしまった。完成品なんかじゃない。出来そこないでどうしようもないんだ。

「私は正直、もしかしたらとは思っていた。だけどこうなることまで予想していなかった。こんなこと言いたくなかった。だけど私は伝えないといけないの。」

姉は僕を見据え、何かを言っている。おかしなことに何か話しているのは分かるけれど、意味が全く理解できない。まるで言葉を忘れてしまったみたいに。だけど僕はこうして言葉で思考している。何が起こっているのだろう。

「……こわ……きおく・しょう……なん……
ない」

何？分からない。ノイズのようになにか意味らしきものが伝わってくる。けど何も分からない。聞いたことのある音の羅列が頭を素通りしていく。怖い。だんだん何かがこぼれていくのが分かる。お願いだからやめて、助けて。

もう何も分からないの？

突然に頭に思考が割り込んできた。

もう一度いうけれど、あなたも壊れかけてる。自分以外の何もかもを拒絶してる。けど原因であるあなた自身とあなた妹の記憶を消去すればまだ何とか助かると思うの。だから、あなたの中の妹に関する記憶を、削ります。いいですね。

いやだ、妹の記憶が消えたら僕は生きていけない。いやだ。やめて。

「全部なかったことにしてあげる」

最後の言葉は何故かはつきりと分かった。けどもう駄目だ。もうあたまがまっしろだ

もう一回

今僕は自分の記憶の中に居る。それは僕にとって最初の記憶の中だけど、かといってそれが事実であるとは限らない。なにせ、僕がまだ現実と空想の違いも分からないくらい年端もいかない小さな頃の記憶なのだ。一番最初の記憶、なんていうのは最低限の常識さえ出そろってない頃から繰り返し思い返し続けているものだ。真実だとか正確さだとか、それが美德であるとさえ分からない非常識な頃だから、自分の好き勝手にこねくり回した結果、本来の事実とは全く異なつた記憶に仕上がっている可能性だつて十分にある。それを抜きにしても、僕の一番最初の記憶はやたら明確で、そして長い。だから、信憑性に関してはもとより疑わしい。まるで誰かに植え付けられてもしたかのようにあまりに恣意的な鮮明さを持つた記憶だ。その記憶は僕が朝目覚めたときからはじまっている。

「おはよう」

目を覚ました僕がカーテンを引き薄暗い室内に光を入れていられるが見える。そして一緒のベッドに寝ていた姉を揺すり起こそうとしている。姉は身をよじっているが起きる気はないのかもしれない。僕が被っていた布団も奪い取り深く潜り込んだのだから。何ていう風に、僕の記憶のくせして、僕はあくまで三人称視点で記憶を見ている。やっぱり怪しくて仕方がない。まあ、単純に妄想と思ひこみによって背景と僕の姿が後付けされただけかもしれないけどね。なにせよ、この後のことは何度も何度も思い出したことだからこれから何が起こるかは何単に分かつてしまえば本当に面白話でもない癖に、先の展開まで分かつてしまえば本当に退屈でしかたがない。けれど今の僕は記憶の中に居るのだ。僕には何の選択権もなく延々と、この一日の記憶を再生し続けるのだろうか。

「早く起きないと遅刻しちゃうよ」

僕がそう言うと姉はしぶしぶといった感じ布団から這い出して、うつすらと目を開けた。光が目にしみるのか、不機嫌そうな顔に見える。僕はそれにおびえた風におどおどと姉の様子をうかがっている。この頃は過剰なDVなんてまるでなかったのだから別にそこまでおびえることもないのね。やっぱりこの記憶は今の自分にリンクして、ある程度修正されているに違いない。普段こんな不確かなものにすがって生活しているのかと思えば、現実の危うさを思い知らされてしまう。

「おはよう。コウちゃん。起こしてくれるのはありがたいんだけど、今日はお姉ちゃんお休みもらったの。だから今日はまだ一緒に寝ていようね」

そう言うなり、姉は僕をきつく抱きしめた。僕は恥ずかしくなったのか姉を無理やり引きはがした。姉は不服そうに頬を膨らませた。しぐさがわざとらしくすぎて愛嬌のかけらも見えない。そんな顔したって嫌なものは嫌なんだよ、とこの時僕は思っていたと記憶している。これにしたって、僕が姉に対する微妙な反抗期を迎えたのは少なくともこのころではないのに。当時は盲目的に姉を愛していたのだから、何をどうされようが嫌だなんて思ったりはしないはずだ。といっても今だってそんなことは思ったりしないけど。ところで、次に僕はこういうのだ。

「せつかく休みなんだからさ、どこかに遊びにいかない？」

まったく筋書き通りだね。この時は確か、お姉ちゃんと普通の日と一緒に居られるなんて珍しいんだから精いっぱい楽しみたいな、

なんて無邪気なことを考えていた気がする。それにしても、このやたらと長い一連の記憶をこうして最初から順を通して思い返していくのは久しぶりかもしれない。もちろんこんな風に記憶の中に入り込んだことは夢の中でさえないんだけどね。さっきは面白くない、何て言っただけれどここういう見方をすれば自分の記憶をほとんど客観的に見れるのだから、その点で言うと今回はとても新鮮に楽しめる。

「そうね。だったら動物園に行く？」

動物園、ね。昔は何の疑問もなくそれを受け入れていたけれど、考え直して見るとなかなか教育的に問題のある場所だったように思う。まあそう思えるだけましなのかもしれないけど。姉は僕を動物園に連れていくたびにとても嬉しそうにしていたし、このときもそうだった。僕にしたって姉と動物園に行くのは大好きだった。姉に対して盲目的だったという点は関係なく、動物たちを見るのは楽しかったから、僕は純粋に動物園が好きだったのだろう。しかし今は好き好んでいこうとは思えないけどね。

「やったあ。早く行こう」

残念ながら、というのもむなしだけれど、この時もやはり動物園行きを大喜びしてはしゃいでしまうのは僕の記憶における規定事項なのだ。それにしても、これが僕の記憶の中のだとしたらあまりに自由が制限されすぎている気がする。こんなことで無邪気にはしゃいでいる自分を眺めるのは全くいい気分がしないのに、目を逸らすことも瞬きさえもできないのだから本当に気が滅入る。

「そうね。支度をするから、まっててね」

このとき動物園に来るのは久しぶりで、僕もお姉ちゃんもとっても楽しく過ごしたんだ。前に来たのがいつだったか忘れてたけれど、その時よりもたくさん動物が増えていて、どれも面白いものばかり。なんて、またしても記憶に齟齬が発生していることに気付いた。だってこれが最初の記憶なのにどうして久しぶりなんて言えるのか。もっといえれば前に来た時の記憶なんてないのだからおもしろさの比較なんてできるわけがないだろう。

「お姉ちゃん、あれなんだろう？」

僕は本をペラペラめくっている若い女のひとを指さしてそう言った。

「あれは受験勉強をしている人だよ」

「じゅけんべんきょうって何？」

「学校に行くためにたくさん勉強することよ」

そうなんだ。動物園に来てまでそんなことしなくてもいいのにな。僕は犬の赤ちゃんと遊びながらそんな事を思った。当時の僕は彼女さえも展示品であったことに全く気付かなかったのだ。姉の創造物モデル受験生。正直何の使い道があったのか全く分からない。その受験生はきもしない試験に備えて永遠に勉強し続けるはずだったのだから。彼女だって人間だからもちろん感情があるのだけど、姉の改変をうけて生きる目的が常に受験に備えた勉強なのだ。のちに彼女は僕の友人となるのだけれど、この時に得た知識ははたして何を受験するための知識だったのか心底から疑問に思える。

「お姉ちゃん、この子とあの子ってそっくりだね」

犬の赤ちゃんはどれもそっくりで見分けがつかなかった。当時は観察眼などまるでなかったのかもしれないが、今見るとその三匹の犬はそれぞれ毛色のバランスがかなり違っているのが分かる。黒が目立つ犬と栗色が目立つ犬、金色が目立つ犬。三つ子にしてはむしろ違いすぎるくらいに違っているような気もする。

「そこに居る赤ちゃんはみんな兄弟だから、みんな似てるんだね」

「でもお姉ちゃんと僕って全然似てないよね」

「あなたはどこまでなぞれば気が済むのかしら」

「何を？」

何で？今の今まで変哲もなかった記憶に明らかな違いがある。憎々しげな表情でそんなことを吐き捨てるような姉の姿なんてなかったはずだ。本来であれば彼女は優しく笑ってそれでいいのよと言ってくれたはずだ。

「あなたは繰り返ししても同じことしかしないのね」

「どうせ次は僕も兄弟ほしいなっというんでしょう。弟か妹どちらがいいのか聞くとお姉ちゃんとおんなじ女の子が欲しいというんでしょう。いいわ。あなたに妹をあげます。かわりにもう、私を悲しませないでね」

そう言って彼女は二匹の犬をつまみだし、残った一匹の犬の首をひねった。子犬は声もあげずに死んだ。

黒の目立つ犬を放り捨てた姉はとても怒っていた。それにとっても

悲しかったです。僕にはそれが何故だかわからない。だけど前ののままとか、これまで通りではいけないんだ、ということとは分かった。

妹と一緒

僕に初めての妹ができてから十年たった。僕はあの頃幼く何もかも知らなかった。そのくせ何でも知っていると思い込んでいたし何でもできると信じ切っていた。実際のところは姉の献身的な愛情とそれに伴う行動がすべて僕にむけられていたからだ。判断力に乏しい当時であればそれをすべて自分の手柄だと勘違いしても、それは責められるようなことではない。

だけど今は違う。知らないこともできないことも嫌というほど思い知らされているし。その事実に向かいたいとも思っている。そんなわけをただいま、絶賛逃亡中だ。

姉の支配下から逃げ出して4日も経っている。4日しか経っていないのに早くも満身創痍で、すでに打つ手が尽きかけている。姉の支配力がいかに絶対的であるかを思い知らされた。そのくせ完全でないのだからこんなことになってしまったのだ。ことの発端は一言でまとめてしまうと、僕と妹が反抗期をこじらせた結果、とでも言えばいいのだろう。だけどあれほど厳密な支配を受けていて何の反抗心も生まれないのだとすればそれは人間としての何かが折れてしまっているかと判断して差し支えないだろう。それまで支配されているとは思いつくしなかつた感情と行動のすべては僕たちの思い通りではなかった。それに気付いたのは妹であったが、それを伝えられた僕にもその絶望が伝播してしまったのだ。だから逃げ続けている。この行動さえも姉の思惑にのっとったものだとは思いたくない。だからこそ彼女の支配地域を抜け出したのだ。だけどそれは多分、支配され続けるのと同じくらい危険で恐ろしいことだ。

満身創痍であるけれどこれからのあてはある。友人を頼ればいい。姉の同格の存在である友人ならば、僕たち兄妹をなんとか自由にし

てくれるはずだと踏んでいる。そのためにはまずこの状況を、自分
たちでどうにかしないといけない。

反抗期

姉の支配からのがれることは自由になることと同時に不死性の消滅も意味していた。姉の支配による恩恵も同時に拒絶することになるからだ。もともとがそういうものである妹はともかく、僕の場合は完全に一般人と変わりない人間性にまで落ちぶれていた。

「お兄ちゃん大丈夫？」

僕をこんな目にあわせている原因である僕の可愛い妹は僕を気遣ってくれている。復元能力もそろそろ切れかけているのだろうか。細かい傷が修復され切れずにそのまま放置されている。人間並みになつてしまった僕を庇い続けているのだから当然といえば当然だ。ぼろぼろになつた服から垣間見える肌に興奮してしまうのも仕方がないのだ。といつてもいつまでも妹に頼りっぱなしでは兄として情けない。

「僕は大丈夫だよ。なんとかするから、ちょっと待つてくれる？」

「うん、分かった」

不安そうな妹の顔を見るとすぐ落ち着いてくる。これが妹の力なのか。はったりで言つた自分の言葉にも自信が持ててくる。先ほどこから周囲に落下し続ける隕石的な何かをどうにかする術は今の僕には思いつきもしない。けどなんとかなる可能性ならある。今妹の能力は姉の支配から抜けた代償として再生以外の能力がほとんど使えない。それは僕も同じであるはずだけれど、僕には死ににくい、という以外の能力を持っていなかった。姉は愛玩動物としての僕に、それ以外の能力が必要ないと判断していたのだろうか。それはあり

得ない。なぜなら姉曰く、僕も壊れかけているからだ。彼女の言う壊れるとは、作り物の能力が過大となつて彼女の思惑を超えることであり、創造物の自律的進化の結果である。

僕の能力の唯一が疑似的な再生能力のみであるとすれば、僕は壊れるはずがないのだ。何故なら僕の10年前の一番古い記憶から今まで、僕の能力に向上は一切見られないからだ。そもそも、その能力すら姉の支援なくしては使えない。だとすれば壊れる原因となつた能力は他の何かであるはずだ。つまり僕には別の過大となつた能力がある。

しかしだとすれば一体何なのだ。10年前と僕と今の僕は何が違う。分からない。

「お兄ちゃん！危ない！」

思いつめていた僕を妹が突き飛ばした。体感的には一瞬遅れて、鼓膜がひきつるほどの衝撃波が僕を襲つた。落下物をまともに受け止めた妹の体が四散して、数秒後に元通りに人の形に戻つた。姉は完全に僕たちをなめきつている。いたぶられている。というか四散？数秒後に元通り？やばい。能力が切れかけている。このままだと多分あと数回も持たないかもしれない。妹が死んでしまうなんて嫌だ。絶対に嫌だ。

「ふざけるな！ぶつ殺してやるから今すぐ出てこいよ！」

僕は出来もしないことを叫んだ。けれど叫ばずにはいられなかった。僕は姉にとってはもはやゴミ屑並みの価値もないのかもしれない。けれど僕にとっての僕や妹はあんなにかよりよほど大切なのだ。伝わったところで鼻で笑われてしまうだろう。知るか。

「こんなことせずに直接出てこいよ腐れビッチが！」

叫んだ僕は、空気が裂ける感覚を味わう。反射的に体を逸らした。落下物に直接ぶつかりはしなかったが熱と風圧で火傷し吹き飛ばされた。妹を見ると絶望的な表情でこちらを眺めていた。そんな顔してほしくない。大体僕はまだ大丈夫だ。と思つた矢先にちょうど足のあたりに隕石が落下してきた。直撃した。僕は紙きれのように弱しく、衝撃を全身に受けた。痛みはさほどないが両足は吹き飛び、もう立ち歩くことさえできないだろうことが分かった。妹は未だに立ちあがれていない。早く逃げてほしいのに。もしかするまだ立ち上がるほどに回復していかないのかもしれない。

姉の遊び具合を見るにこんな状況になつてしまえば僕たちを放置し野たれ死ぬ様をを楽しげに眺めるに違いない。死んだら絶対呪い殺してやる。死んだ方がましつてくらいに残酷に殺してやるよ。

「お兄ちゃん。顔怖いよ」

よろよるとすがりついてきた妹の顔を見ると先ほどまでの攻撃的な感情は収まってしまった。妹にはこんな表情見せたくなかったのに。僕としたことがうかつだった。これもすべて姉のせいだ。

姉のせい？それはおかしい。僕が姉に敵対的感情を抱くなんて。考えてみればそんなことありえない。

それはあくまで言葉としての抑圧

僕はいつの間にも姉を憎むようになったのだろうか。拒絶など考えもしなかったのに。僕は姉のことを心の底から愛していたはずなのにどうしてこうなってしまったのだろうか。そもそも姉に対する反抗などあり得ないはずだった。僕はそういうものなのだから。姉の創造物の完成品としての僕は姉の愛玩具であり続けるはずなのにしかし実際に僕は、姉に反逆している。別の他人にすぎらうとしている。僕たちの女神たる姉に対して、これ以上ない背信行為だ。

だとすればこの反抗心は単なる欠陥なのだろうか。綻びから生まれた不具合なのだろうか。完成品のくせにそんなことがあり得るのか。そもそも完成品って何だ。姉が僕にそう語りかけていただけに過ぎない。それはただの睦言だったのか。それとも特別な意味を持った言葉だったのか。仮にそれが、僕を優越感に浸らせるためだけに与えられた言葉だとすれば、この欠陥はただの欠陥だ。言葉通りの意味で僕は壊れかけているにすぎない。こんなちっぽけな反抗心など何の意味もない。

何だよ。結局僕は何もできないまま死ぬのか。姉もそろそろ飽きてくるだろうし、だとすればひと思いに殺すのだろうか。手を下すことすら億劫になってそのまま放置されてしまうのだろうか。どうせならそうしてくれ。もしかすると妹だけでも助かるかもしれないし、それが無理だとしても少しでも長く妹と一緒に居たい。僕の可愛い二人目の妹。一人目は別の誰かに引き取られてしまったし、その子に関する記憶は姉に引き抜かれてしまった。だから僕は今いるたった一人の妹を助けたかった。せめてこの一人だけでも助けたかった。妹は健気にも自らの服を犠牲にして止血をしようとしてくれている。妹だって、見た目は無事だけれど、中身はまだぐちゃぐちゃだろうに。痛みを耐えて顔を歪ませている。

「もういいよ。見てられない。そんなことしないで、何かお話でもしよう」

「いやだよ！お兄ちゃん死んじゃうなんて」

「じゃあ二人が助かる方法でも考えようか？」

例え無駄であっても、生きようとする意志自体は誇らしいものだから。決して意地汚い感情ではありえない。だから僕はそう提案した。もしかするといいアイデアでも浮かぶかもしれないし。それにこの話題だったら妹も罪悪感なく付き合ってくれるだろう。

「うん。でもまず血を止めないと。そうじゃないと、ちゃんと考えられないから。本当にごめんなさい、私のせいで」

妹は未だに僕が助かると思っているのだろうか。それとも分かっているが気休めを言っているだけなのだろうか。震える声で泣きそうに話す妹を見ていると、僕には判断が付けられない。

「君のせいじゃないよ。悪いのは全部お姉ちゃんだ」

僕がそう言った瞬間だ。何か切れる音がした。というのは不正確な比喩でしかなく、もしかすると破けた音だとか千切れる音だとか言った方がふさわしかったのかもしれない。とにかく、何かが変わった。仰向けで死にかけながら、妹を仰ぎ見た。

妹から表情が消えている。しかしそれは無感情によるものではない。何かしらの感情が飽和し、混乱している。あまりの驚きに顔つきが変われないのだ。妹も変化を感じ取ったのだろう。そして自らを驚きの極地に追いやる何かに気付いた。何か明らかに変わった、

それ以上のことは僕には分からない。

「何が起こったの？」

僕は妹に聞いた。妹が表情を取り戻す。取り戻したのは、何かに対する畏れだ。

「お兄ちゃんは、あの人を悪く言った。お兄ちゃんはあの人何なの？」

妹がそう言いきる前に隕石が落下してくるのが見えた。それも無数に。姉は世界でも終わらせるつもりなのだろうか。現在は支配領域同士の緩衝地にあるとはいえ。これだけの物量だと別の支配地にまで被害が及ぶかもしれない。それだけ恐怖をおおるような光景ではあつたけれど、不思議と何の感慨も浮かばなかった。ただ案外あつけないと感じただけだ。そして僕は最後に妹の声を聞いた。

「お兄ちゃん。私たち助かるよ」

ぼんやりとした頭で僕は妹の姿を見た。妹が頭上を見上げると、すべての落下物は消えうせた。

展開が浮かばないとかじゃなく

何度目だろうか。僕は最近自分の意思とは関係なく意識を失うことが多い。そして目が覚めると自分の意思とは関係なく状況が変化している。大抵は僕が望まない状況で、そのうえ取り返しがつかないようなことばかりが起こり無力を感じる。

周囲はあまりに自分勝手に動き、僕は自分の無力さに呆れ果ててしまう。あくまでそれは僕の都合による難癖だという自覚はあった。とはいってみたけれど、今回に限って言えば僕が行った行為がもたらした結果であって、決して僕にとって悪い結果ではなかった。意図せざることではあったけれど。最後まで可能性を見つけようと思えなかつたからこそあらん限りの運が僕に味方してくれたのだろう。それくらい奇跡的なことだった。けれどその果てがこれであるなら、何かを信じようとした僕はただの馬鹿だったのではないかと思う。

目が覚めたら自分の部屋に戻されていた。最後の記憶で言う僕妹に助けられたような気がしたのだけれど、あれはすべて幻覚か何かだったのだろうか。起き上がると助けを求めたはずの友人と、僕が敵対していたはずの姉が仲良く談笑している。

この人たちはグルだったのかと一瞬だけ激しい憎悪が渦巻いたけれど、すぐにそれは収まった。この調子だと妹はまたしても処分されてしまったのだろうか。もういい加減にしてほしい。だから僕は何もかもを諦めようとする時思った。

「おはよう。久々に」

「おはよう。もう会うこともないと思ってた」

どうして僕だけが保護されているんだろう。目の前にいる姉と友人を見るとそう思えてきた。

「君は起きたことを理解しきれいていません。だから私が何から何まで話してあげましょう。あなたの作り手は、あなたに対して私情を挟まず話すことはできませんから」

「なんで君がいるの」

「黙りなさい。といつてもそんな言葉、あなたにはもう意味がないでしょう。ですからこれからあなたがどんな口をはさんでも私は話し続けます。理解できないことがあれば質問してください。いいですか？」

「よくない。といつても話すんだろうね。いいよ、好きにしてくれたら」

「まずあなたは完成品としてついに完成しました。あなたはもう姉の支配物ではありません。」

「ストップ。なにそれ？どういうこと？」

僕は何が起こっても口をはさむつもりなどなかったけれど、いきなりここまで理解に苦しむ発言をされるとつい横やりを入れざるを得なかった。友人の唐突な言葉で僕の無関心は失われてしまった。狙って行ったのだとすれば僕はこの人のことを低く評価しすぎていたのかもしれない。

「はい。すべて今から順を追って話します。それと逐一突っ込みをいれられてもめんどくさいので口をふさがせてもらいます」

そういわれると僕の口は熱くなり溶着されてしまった。

「コウちゃんに何するのぶっ殺すよ。表に出なさい」

姉が指で僕の口を一なぞりすると、くっついていた唇は元通り開くようになった。

「好き勝手いいやがって」

友人を引きずり部屋をでていった姉に対して僕は苦々しく吐き捨てた。彼女は切なげに僕を見たが、今更知ったことではない。というかこの投げっぱなしはどうするんだよ。不完全燃焼ってレベルじゃないだろ。とおもっていたら小さな女の子が部屋に入ってきた。ちょうど妹と同じくらいの年齢だ。腰まである長い黒髪を結び、やたらに長いポニーテールにしている。見るからに活発そうな女の子のポニーテールってマジでいいよね。躍動感が強調されるといっつか、見るだけで元気になれる、みたいな。妹みたいな栗色ヘアのゆるふわウェーブもいいなとは思っていたけれど、黒髪ストレートこそやはりジャスティスなのだろうか。

「あの人たちはちよつとの間帰ってきそうにないから、私が代わりに説明するね。あの人たちにはいろいろ奪われたんだから、それくらいいいよね」

「もちろんいいに決まってるよ」

この無邪気な笑顔の前ではすべてが許されるに決まっている。

「じゃあ説明始めちゃうね。まず、お兄ちゃんはね」

「お兄ちゃん？」

となんとなない疑問を口にする。肩口を噛みちぎられた。傷口のグロさとは裏腹に痛みも出血も大したことはない。蚊みたいな子だ。なとおもったけれど微妙に失礼なので口には出さない。

「お兄ちゃんはお兄ちゃんでもいいの」

もぐもぐと口を動かしながらその子は話を続けた。

「まず、お兄ちゃんは、あの人たちと同じになりました。これからお兄ちゃんは全部自由になるんだよ」

展開が浮かばないとかじゃなく（後書き）

一度やってみたかっただけ。

妹力って何だろっ

「お兄ちゃんはその人の創作物なんだけど、その癖その人に刃向かうことができたよね。それがどういうことかっていうと、お兄ちゃんを作った人はお兄ちゃんを私たちみたい完全な隷属状態の人形にはしなかったってことなの。つまり自分の支配下におかなかたってこと。だけどお兄ちゃんはあの人に逆らえなかったよね。なぜかっていうとね、あの人のが能力って知ってる？あの人種は自分の創造物に対してはほとんど万能に力をふるえるけど、それ以外に使える能力は私たちと同じように得意不得意可能不可能があるの。それで、あの人のが使える能力は思考支配なんだ。本来はほとんど万能に誰にでも機能するんだけど、お兄ちゃんには効かなかったみたいだね。お兄ちゃんはあの人に逆らえないと思っただけで、実際はあの人に対してお兄ちゃんは何の支配も受けてなかったの。けどそれに気付きさえしなかったからいつまでたってもずっとお姉ちゃんの思い通りでい続けた。といつても所詮は形だけの、口だけの制約しか受けてなかったわけだから、きつかけさえあればそんな洗脳はすぐに解けちゃうわけだね。って何？うるさいよっ、。からほえあお兄ひゃんが、、思考支配能力者の創造物で、その上実質的には何の支配も受けてなかったわけだから、特別に耐性でもあったんじゃないの？分からないけど。それにしてもお兄ちゃんおもしろいね。そんな訳で、お兄ちゃんは完全に支配を振り切ってお姉ちゃんと同格になったのでした。おしまい。」

説明不足もいいところだ。知りたいことはまだたくさんあるのに、はぐらかしているのか説明が下手なのか、この子と僕では知りたいと思えることの優先順位が違うのか。肝心なことはほとんど話してもらっていない。女の子の食餌行動によって更に深くえぐれた肩口からは、血に染まった骨が見えている。これ以上自分の鎖骨がむき

出しになったところで、全く嬉しくもないのでそれ以上余計な事を聞くのはためらわれた。

「不服そうな顔してるね。もっと聞きたいんだったら、その妹に聞けばいいよね」

女の子は不機嫌にそう言い放った。けれど妹？確かにあの状況からだと助かっていてもおかしくはない。ただ姉につかまってしまった以上は無事は全く予想していなかった。そこってどこだよ。心の中に居るよなんて冗談だとすれば、さすがに不謹慎だ。

「妹は、どこに居るの？」

「ここにもいるし。そこにもいるよ」

そう言っただけで彼女は僕のベッドを指さし、そして布団をめくって見せた。なんとということだ。妹は僕のベッドの上で安らかに眠っていた。もちろん安眠的な意味であって永眠的な意味ではない。白いシートにおさない少女の栗毛色の髪の毛が広がる様は、さながら神話世界が顕現したかのようだ。しかし。このぼくが妹に気付かないとは。あり得ない程の落胆が僕を襲う。落ちぶれてしまった。あまつさえなんとなく布団から出て行ってしまったなどと、一生の不覚でありそれは取り戻すことのできない瞬間であった。とりあえず僕はベッドに戻り妹に添い寝する。

「ずるい。私も」

黒髪の女の子は拗ねたようにベッドにもぐりこんできた。別にいいんだけどね。

「君も僕の妹だったらよかったのにな」

「何言ってるの？私も、お兄ちゃんの妹だよ。忘れちゃってて、覚えてないだろうけど」

それを聞いて僕は納得した。僕に居たもう一人の妹は誰かに引き取られてしまったのだった。その引き取り先が友人のもと出会ったところで特に不自然はない。姉の創造物をまともに扱えてかつ交流のある神格は僕の知る限り友人を置いてほかにいない。僕が栗毛の妹に気付けなかったのも、本能的に覚えていた黒髪のほうの妹性に気をとられ、鈍ってしまったのだろう。それであっても、僕は妹であろうその子に返す言葉が見つからなかった。この子に関する情報ほとんどすべて削除されてしまったからだ。記憶の封印だとかそんなものではなく、完全な物理的削除でそれを思い出すことはもはや不可能だ。彼女が妹面をすることは当然であるが、彼女のことを何一つ知らない僕が、彼女に対して兄貴面をするのは道理に反している。見かけだけ取り繕ったところで、結局僕は兄としての思い出も資格もないのだから。それでも僕は、今はそうでなくても、元々の兄として何かを言わなければならぬだろう。一方的に僕を兄としているこの子が不憫でならない。僕のことを食い漁る彼女は、おそらく僕のことを慕ってくれていたのだろう。その人の体の一部を自分のものとしたがるのは、強すぎる独占欲の証であるから。以前の兄妹には戻れないだろうけれど、これからの兄妹にはなれるだろう。だから僕は彼女に告白する。

「君が妹だったらいいなって、一目見たときから思ってた。これから僕の妹になつてくれませんか？」

僕の黒髪の妹は目を見開き言った。

「ええ、嫌だよ」

ええ、なにそれ。

だから義妹は嫌なんだよ

きつとあれだよ。お兄ちゃんの兄妹になったら、結婚できないじやん、みたいな何気にうれしい理由に決まってるよ。でも違うんだよね。妹に恋愛感情って大間違いだよ。妹は単純に愛でるものであって、決して肉欲的な対象としてとらえちゃいけないだよ。幼い子供が年上にあこがれるのはある意味当然なのに、騙すみたいで妹との恋愛ってすごく不純で気持ち悪い。これが義妹だったりしてみる。そういう設定だとすれば、もともとから肉体関係前提みたいでごく嫌なんだよ。その点で言うと義姉はありなんだよね。ある程度判断能力があつてそれでいて弟を食ってくれるっていうシチュエーションには来るものがあるし、その上逆らう理由もない。まあ、弟食っちゃう時点で判断能力はどうかしてるんだろうけどね。うちの姉なんて言葉どおりの意味で食っちゃうし。本当に、どんな判断だよ。他人の命をどぶに捨てる気満々だ。

でもあれなんだよね。今回のもと妹に関しては、言葉どおりの拒絶ってこともあり得ない話ではない。なにせ僕にはこの元妹の記憶が一切ないのだ。栗毛の妹にはそれなりに好かれてるし、そのように接してきたけれど、もしかすると黒髪の妹には辛い態度で接してしまっていたのかもしれない。だとすればそれこそ僕場何度殺されてもしょうがないし、そのたびにどぶに捨てられてもそれは相応以下の罰だ。そうだよな。そもそも僕が姉にこの妹なんてもういない、何て言ったせいかもしれないし。そんなことは絶対にあり得ないと思いたいけれど。でもわからないんだよね。僕は自分が分からない。分からないことだらけで今も結局自分の状況さえもわからないし。しょうがないから方に風穴開く覚悟でこの子に問い詰めてみるべきなのかもしれない。でも、これ以上嫌われたら僕は栗毛の妹を残して自殺しかねないくらい深い傷を負うに違いない。僕はちりちりちりと元妹を見やり反応をうかがう。目が合いそうになるた

びつい目をそらしてしまう。そのたびに、弱い自分を自覚し自己嫌悪に陥る。表情が段々と色を失っていくのが自分で知れる。

「あの、なんかごめんね。冗談だよ。そこまで落ち込むとは思わなかったよ。私はお兄ちゃんのこと大好きだから、もちろんお兄ちゃんの妹でいたいな」

だと思ったよ。僕が妹に対して嫌われるような態度をとるわけがない。でも反抗期を迎えられたら分らないんだよね。今それなりに好かれている分、嫌われたら僕は本当にショック死してしまうだろう。その前にぜひ不死性を身につけておきたいところだけど、姉から自由になったという今、そのあたりの能力は一体どうなっているのだろうか。

という訳で、恐らく色々知っているであろう栗毛の妹に話を聞くのではないか。

だから義妹は嫌なんだよ（後書き）

個人的思想が混じってしまったので反省の余地あり
こついうのは短編で書くべきだった

なん・・・だと・・・

「残念でしたね。その子は起きませんよ」

ついに真実を聞こうかという時、タイミング悪く支配者一行が戻ってきてしまった。この期に及んでまだ邪魔をしようというのか。話が全く進まないではないか。

「今まで何してたんだよ」

「あなたのお姉さんを仕留めていました。私とて、あれほど強引に喧嘩を売られたら買わないわけにはいきませんからね」

「そんな恰好で、恰好つけたセリフ言われても」

姉に全身を縛りあげられてみの虫状態になっている友人を見て、僕はそう言った。凹凸のなさから言って、みの虫というよりもむしろだるま状態になっているのだろう。凄惨な見た目ではあるけれど、血色が悪くないことから、命に別条はないのかもしれない。

「さすがに君の姉ですね。支配領域内とはいえ私の万能を押し殺してねじ伏せてこんな姿にしてしまうとは」

当の姉はというと、僕と目が合わないように顔を伏せている。今更、何を気まずく思うことがあるのやら、わからない。こうなってしまうた以上は、姉にすべてを話させるしかないようだ。そもそも、妹が無事である以上、姉に対する憎しみは消えてしまったのだし、いまさら反省じみた態度をとられても困る。

「お姉ちゃん。説明してくれないかな。僕はまだほとんど何も分かっていないから」

「まだ、私のことをお姉ちゃんって呼んでくれるの？あんなひどいことしたのに？」

泣きじゃくりそうに堪えたセリフは、実際のところ震え途切れでほとんど聞き取れなかったから、多分こんなことだろうなという僕の推測が混じっている。大方間違っではないだろうけど。

「お姉ちゃんはいつまでたってもお姉ちゃんだよ」

「うん、ありがとう」

姉はそれから本気で泣き始め落ち着くまで何も語られなかった。僕の中ではもう少しお高くとまった読めないキャラであった姉の姿が崩壊してしまっている。これが素だとは到底思えないけれど、だとすればどうしてこんなことになってしまったのだろうかと疑問が浮かぶ。どうせ僕たちの背信行為に混乱してしまっただけなのだろうね。

「まず、コウちゃんと妹ちゃんが助かった理由だけど、それは君の能力に関係しているんだ。君の能力は私の真逆で、反逆の力だよ。誰の支配も受けない、完全に自立した存在。そしてその反逆能力は他人にも影響する。あの時君は、妹ちゃんに何か、私の支配の枷を外すような何かを言ったんじゃないかな。妹ちゃんの能力は再生の力もそうだけど、危なすぎて封印してた能力があつてね。それが消失の力なわけだけでも、君の発言によってその能力制限の支配が解かれてしまったんだよ。そして私の攻撃を全部気し去ってしまったんだ。だから私が直接出向いて、君たちを回収しにいった。さすが

に君の反逆能力といったところで、私の本気には敵わないみたいだね。そもそも妹が私の思考支配に気付いて逃れようとした理由なんだけどね。元々君の反逆能力は途中からダダ漏れ状態で、私の各種創造物にも影響を与えてたの。といつても、そこはお姉ちゃんだから、その程度の影響は訳もなく無効化してたんだだけだね。というかそのつもりだった。だけどそのうちに君の能力は肥大してしまつて、まず君の一人目の妹、その黒髪ちゃんだね。その子が反逆を始めた。ただし直接私に逆らえないから、代わりに世界だとか、君に逆らうことで間接的に私に逆らってたんだね。さすがの私も、このままじゃまずいと思つて、君の処分を決めたわけだよ。で、その矢先にあれだ。はつきり言つてね、君は私にとつて誰よりも大事だ。しかし、辛い事実をありのまま伝えてしまうとね、君は私にとつて私より大事ではなかつたんだ。だけど今回、君を私から解放するといふ方法を持つて方が付いたのは、少なくとも私にとつては喜ばしいことだよ。君のこれからを思うと、若干不安は残るけどね。まあそれを鑑みて、君のお気に入りだった妹をプレゼントしたという訳だ。大体ことの事情は分かつたと思うけれど、それでも質問があるというのならそのうち受け付けるよ」

「質問はまだあるんだけど、今のところ一番気になるのは、どうして妹は起きないの？」

「それは私がその子の所有権を放棄して、君を新しい主人としたからさ。今はスリープ状態だけど、名前とキスでもあげたら目覚めるんじゃないかな。やってみるといい」

「キスしていいの？」

「ただしくは、キスしないといけない、だね。しかもベロチュー。君の体液を認識させないといけないから。ちなみにいうと、君の体

液は私が支配を解いた時点で変質しているから、今や君たちに血縁関係はない。君はこの子を妹と表現したがるようだけど、それはもう、ふさわしくないね。全くの他人だ。無理矢理そういう設定をつけたいのなら、義妹ということにでもしたらどうかな」

義妹・・・だと。

結局設定だからそこまで気にしなくても

僕は一つの決断を迫られている。妹をどう扱うべきか。妹から妹をとると一体何が残るのだろうか。古くからの関係。つまり幼馴染的な。普段の僕であればその設定を受け入れることに抵抗はない。けれど対抗馬・義妹。僕が好まない設定が選択肢にある。そう、好みではない。しかし。ただそれだけを理由に切り捨ててしまっているのだろうか。

運悪く兄妹同士で好き合ってしまう。しかも血のつながり。それは倫理的にも生物学的にも許されるものではない。そこに射すたった一筋の光明。実は血の繋がりなんかなかった。すなわち義妹。それは報われないはずだった愛に対する救いである。そのような口マシンあふれる設定を僕の個人的都合でなかったことにしているのだろうか。

別に幼馴染の設定が嫌だという訳ではない。だけど妹にはいつまでたっても妹でいてほしいという僕の願いだっているのだ。そうあってほしいという願望と、そうであってほしくないという願望。二つが拮抗しせめぎ合っている。すなわち妹であってほしいという気持ちと、義妹は嫌だという気持ち。僕はどちらをとるべきなのだろうか。いっそのままで、ただの妹として扱ってしまうのはどうだろうか。しかしそうもいくまい。妹である以上、実妹義妹の区別は恐ろしく重要なファクターであり、それがあいまいであることは一妹好きとしてはあり得ない決断だ。だからと言って、答えを出してしまえというのか。無理だ、とそう諦めかけた僕に一つのひらめきが浮かんだ。

「妹の体液を僕に近い形で、兄妹のレベルにまで近づければいい！」

「それに関してはオススメはしないよ。彼女の体内を、人体実験よ

ろしく好き放題弄くり回すつもりかい。たしかに再生能力が高いからいつか君の望む血縁関係に近づけることは出来るかもしれないけどね。だけどそれは鋼の錬金術師が賢者の石を見てそれを生成するくらい難しいよ。君が妹にそれを望むのなら敢えて止めはしないけど、どうする？一応その方法も示してあげられるし。ちなみに君が妹の血縁に近づく、つまりもとの状態に戻ることは無理にでも止めるよ。君は再生能力に乏しいからね。私の支配を受けていない今となってはなおさらそうだ。多分一回目の肉体改変で二度と立ち上がることはできなくなるだろう」

「まじですか」

「まあ、悩む時間はそれなりにあるのだから、たっぷり考えるがいいよ」

何となく名案が浮かんだと思ったけれど、現実はそう甘くもないようだ。さすがにそこまでして彼女に実妹であり続けてもらう必要はない。何せ実妹へのこだわりは僕のがままでしかない。ここで発想を転換してみようか。まず実妹とは何ぞや、というところから始めてみる。実妹とはすなわち同じ父母から生まれた妹のことだ。僕を作ったのは姉だ。だけど姉は母親ではない。あくまで姉。ただし義姉。母親と呼べるものは別にいる。僕と妹の母親は少なくとも同じなのだから、その事実さえあれば彼女は別に物理的な血縁などあってもなくてもよいのではないだろうか。発想の転換というよりはむしろ曲解である。だけど、別にかまわないと思う。実妹なんていうのはあくまで設定なのだから。そう。実情はどうあれ、彼女は僕にとって実妹であり続けられそれでいいのだ。僕の中で、彼女は実妹であるのだと決定されたけれど。

「本当にそれでいいの？ずっと可愛がってた妹と、気兼ねなく色々

できちゃうんだよ。心の中で色々と思っていたことを本当にできちゃうんだよ。あの子も多分それを拒絶しないよ。あとはお兄ちゃんの気持ち次第なのに、義妹という設定を捨ててしまってもいいの？ 私にはわかるんだよ。お兄ちゃんが実は、あの子と実の兄妹でなかったらいいのについて考えてること。というか心の奥底で実は、義妹という設定にあこがれていたんだよね。もうばれてるんだから、隠さなくてもいいんだよ？ 実妹とするまでの勇氣はなくても、義妹との関係っていう背徳性には思うところがあつたんだよね？」

それは悪魔のささやきだった。僕は義妹を肯定するつもりは微塵もない、はずだ。だけれど頭に響いてきたこの声を即座に振り払うことはできなかつた。僕は義妹にあこがれていた？ それはありえない。だけど僕はしょせん作り物だ。自分の考えていることが本当であることなど保障できない。今までのことすべて、そう思わされているだけだという可能性だって否定できないのだから。

「っていつかなんでそんなこと分かつちやうんだよ」

悪魔というより小悪魔みたいな黒髪の妹にあやうく飲まれてしまふところだった。僕が実は義妹好きであつたなんて、冗談もほどほどにしてほしいものだ。僕の思考を読み取ったかのような甘い誘惑にまみれた言葉はあまりに心にしみてしまった。

「とにかく、妹は妹で、しかも実妹ってことはもう決定したから、これ以上の議論はしない！」

「なんだ。もつたないね。チャンスを自分から投げ捨てちゃうんだね」

「そういうこと言わないで本当におねがいだから」

揺らいじゃうから。

「まあ、義妹には私になってあげるから、落胆はしなくてもいいよ。それでいいでしょ？」

黒髪の妹は姉を見遣り、そう尋ねた。

「コウちゃんの目付け役としては、正直たよりないけど、他に適任がないのも事実だからね。しょうがないから許可しようかな。もちろん、思考の読み取り能力はこれ以降制限させてもらうけど」

「ええ、なんで？」

「コウちゃんも日ごろから思考ダダ漏れだと気が休まらないだろうからね。仮にも私のもとを離れてコウちゃんと暮らすんだ。前に暮らしていた時の素行を鑑みても、能力制限は当然だろう。文句を言う前に自分を変えてみるんだね」

「しょうがないなあ。でもちょっとだけならいいでしょ。お兄ちゃんが何考えてるかわかれば、こっちとしても色々とサービスしやすいし」

「たしかに、コウちゃんの動きを把握するためにも多少は必要ではあるかもしれないね。そのうち制限をゆるめるかもしれないけれど、少なくともすぐには無理だ」

「わかったよ。それでいいよ」

なんて、妹は若干ふてくされ気味にこたえたけれど。僕は何かから

突っ込めばいいのやら。

余計なことを・・・

一連の会話が僕をからかうものでないとすれば、僕は実は義妹という設定に心の底では、言い方を変えると心の底から憧れていたということになる。といつてもいまさらシヨックは受けない。なんだかんだと言いつつもこれまでの葛藤で別に義妹だろうが実妹だろうが気持ちさえあればどうでもいいや、という気になってきたからだ。それでも実義の線引きは気にしたいんだけどね。それはともかくとして、ぼくはそろそろ栗毛の妹を起こしたいなと思ってきた。なんだか長い事喋ってなかった気がする。それでなくとも、妹には僕を救ってくれたお礼さえ言えてないのだ。早いところ方をつけてしまいたい。

「ところでさ、目覚めのキスって日ごとにしないといけない決まりでもあるの？」

「ないけど、どうして？」

「だってお姉ちゃん毎日してきたじゃん」

「あれは私が好きでやってたことだから、気にしないでいいよ。それにしても残念なのは、これからコウちゃんには簡単に会えなくなるということだ。私はこれからどうすればいいのだろう」

「いや、新しく変わりでも作ればいいじゃん」

「コウちゃんは唯一無二だから新しく作れないんだよ。能力的にもどの創造物よりも危険だしね。バックアップさえとってないんだ。ただど体のスペアはいくつも作ってあるから、死なない限りいつで

も私のところに来るといい。元通り完全にしてあげるから」

「ありがとう、お姉ちゃん」

それよりも早く、妹とキスしたい。というのは間違いで早く起きてほしい。そしてお礼を言いたいし謝りたい。それにしても、だまからかせば毎日キスさせてくれるんじゃないかな。こじつければ理由なんてなんとでもでっち上げられるし。別にそこまでしてキスしたいわけじゃないけどね。

「お兄ちゃん、分かっているとと思うけど、お兄ちゃんの考えてること分かっちゃうんだからね」

黒髪の妹があきれた調子で言った。しかし大丈夫だ。問題ない。僕は自分の思考を完全にカムフラージュしているのだから、妹には何も伝わらない。

「もちろんわかってるよ。僕は恥ずべきようなことは何も考えていないからね」

「あのさ、私は別に言語的思考を読み取っているわけじゃないんだよ。その人の真意っていうのかな？思っていることが具体的にも抽象的にも分かっちゃうんだよね。思考パターンをそのまま再生している感じなの」

つまり、僕が一刻も早く妹とベロチューしたいだとか、この子所有物なんだしある程度の色々融通はきいちゃうんじゃないかな見たいなことさえすべて隠し通せていないということなのか。

「まあ、そうなっちゃうよね。でもね、お兄ちゃんの気持ちは分か

るよ。だつてお兄ちゃんがその考えに至るまでの道筋も全部理解してるんだもん。今の私は多分、お兄ちゃんよりもお兄ちゃんの気持ちを理解してるよ。だからさ、お兄ちゃん。私の方を向いてくれてもいいんじゃないの？私のこと嫌いなの？どうして私のこと何にも考えてくれないの？」

そういつて彼女は僕を睨みつけた。その顔、いいね。それにしてもいきなりシリアス展開かよ。といつても彼女の言ってることは全く理解できない。思考が読まれると聞いてから抑えてはいるものの、黒髪の彼女は視界に映るたび、僕の妄想の中では18禁では済まされないような目に遭い続けているというのに。ていうか、今更だけど、僕は今まで思考を読まれ続けていたのか。気にし始めると、彼女の眼を直視できない。マジで恥ずかしい。目を逸らすと、余計に神経を逆なでしてしまつたようで、彼女はついに僕に掴みかかってきた。

「ほら、ここまで言つても何も考えてくれてない。お兄ちゃんの心に私は映らないんだ！」

「もしかして、とはおもうけれど、今までの君の素行の悪さはそれが原因なのかい？コウちゃんが振り向いてくれないつていう。だとすればそれは勘違いだ。君自身にの関する思考情報は基本的にわからないようになってるからね。私だつて、仮にも君の創造者なんだから、自分の評判を聞かせ続けるようなひどい目には遭わないよう配慮したつもりだつただけねど」

「え？」

「だいたい、コウちゃんだけじゃなく、そもそも誰の心にも自分が映っていないんだからその程度のこと、すでに気づいていると思っ

「ただけどね」

「そんなの全然気にしたことなかった」

「まったく、不幸な行き違いだ。君が兄以外にも興味を持って生きてさえいればよかったものを」

「そうだよ。それに僕は君と出会ったときから、君のことが頭を離れないんだから、おかしいと思ったんだよ。」

「そうなの？嘘じゃない？」

「嘘ではないね。」

しかし、この子に僕のあられもない思考内容が伝わっていないと分かれればしめたものだ。何の気兼ねもなく妄想を解放できる。さすがにこんなのはれたら嫌われる程度じゃすまない、ってレベルの内容だ。

「まあその証拠に、といってもいまさらだけど、コウちゃんの思考をすべて通してあげてるんだけど、感想はどうかな？」

一杯のカルピスを・・・

僕は素早く思考を切り替えた。妹に対し脳内土下座状態だ。妹の目はうつろで生気がまるで失せている。そして聞き取りづらい言葉で何事か呟いている。

「お兄ちゃんは本当に私のこと考えててくれるんだね。私、もう片方の妹よりもすごいんだね。私は幸せ者だよ」

「余計なことをしてしまったようだね」

姉は苦笑しながらこちらを向く。僕としてはそんな冗談じみた話で済ませてほしくないので必死に懇願する。このままじゃせつかく取り戻した絆がなかったことに、妹的にはなかった方がいいようになってしまう。

「さっきの記憶引き抜いて、このままだと僕は妹に嫌われちゃう」

「まあ、今回は私も考えなしだった。そのことについて責任をとってあげよう」

苦笑というのは僕の勘違いだったらしい。姉はにやつきを抑え込んでそれっぽく見せているだけで、この状況を本気で面白がっている。おそらく彼女はこうなることを予見していたのだろう。姉の能力から考えて僕の思考を読み取るなど造作もないことだろうから。

「頼みます!」

いかに姉がこの惨状を作り上げたのだとしても、僕はそれにすが

るしかなく、全力で土下座した。土下座と言いつつもふかふかしたベッドの上で行ったことなので誠意的なものが伝わったとは思えないけれど。妹のうわ言が、あんなの無理だよ、でもこれならいけるかも、それでもお兄ちゃんが望むなら、まで変わってしまった。ゆゆしき事態だ。妹が人間を捨てかけている。早くなんとかしないと。

「まあ、冗談はこれくらいにしようか」

そう言っ て妹の頭に手をかざしたけれど。

「いらない！」

妹はそういって姉の手を振り払った。

「私はお兄ちゃんの気持ちを知れただけで十分満足なの。それを消すなんてやめて。わたしだってわかってるもん。お兄ちゃんのあの妄想は私をモデルにしてはいるけど、実際の私にあんなことするつもりはないんだって。ちゃんと大事に思っていてくれてるって。ただちょっと、衝撃的だっただけで・・・」

まあ、まだ10歳だしね。刺激が強すぎたのも無理はない。というかあれだけの扱いをされても、そこまで思考修正できるってどれだけメンタルに優れているのだろう。全く未恐ろしい妹だ。ただこう言ってしまうと限りなく利己的ではあるけれど、頭の中とはいつでもあんな目にあわせた対象と暮らし続けるなんて僕の精神衛生には限りなく悪い。出来れば記憶を消してほしいのだけれど。妹が望むのなら僕はそれを罰として受け入れよう。

「お兄ちゃん。何度も言うけど、私にはうわべだけ取り繕っても意味ないんだよ」

まあ、恰好のいい雰囲気です。罰だなんて言っているけれど、実際のところはほとんどご褒美みたいなものだ。妹を羞恥にまみれさせ、精神的に汚す。あらゆる初めてを奪い全てを僕のものにした（頭の中でだけ）。そういつた限りない支配欲を満たされた現状を忘れさせるなんてもつたいたなくしょうがない。最初に記憶を消してほしいなんて頼んだのも妹のためでなく、単純に僕が嫌われなくなつたからだ。恐らくそれらが受け入れられた、という今となってはそんなこととして欲しくもないというのが本音だ。とはいっても仮にこのような僕が嫌われたところでそれはあらゆる意味で当然でむしろこの状況が奇跡のようなものなのだから、今までがあつたという事実だけで僕は一生暮らしていける気がする。それでも妹は付いてきてくれるんだろうけどね。

「もちろんそうだよ」

「とまあ、一区切りついたところでサービスタイムは終了だ。恐らく絆も今まで以上に深まったことだろう」

「私はお兄ちゃんがなに考えてるか分からなくなるけど、それでも私のこと考えてくれてるって、信じてるからね」

もちろんだと、僕はうなずいた。で、そろそろもう一人の妹を起こしたい。

第一部・完 的な

「君は妹を起こしたくてしょうがないようだけれど、キスのほかにもう一つ起動条件があることを忘れていないかい？」

なんだっけ？覚えてない。

「完全に忘れているのか、それとも元から聞いていなかったのか分からないけど。名前をつけないといけないんだよ。個体を認識するためには必須だから」

そんなこと言ってたっけ。キスで頭がいつぱいになっていたせいなのか全く記憶にない。覚えた覚えがない。

「でもさ、妹にだって元々の名前があったわけじゃない？だったらそれを流用するわけにはいかないの？」

そういえば、妹は僕にとって妹でしかなかったから、実は名前さえ知らないんだ。そんなものなくても妹でさえあればよかったのだから。

「それも確かに一つの手ではあるけど。しかしそれだと設定がめんどくさいからね。簡単に言うとそのままと元の名前のデータを再利用するにはすべてのデータを白紙にしないと認証されないんだよ。そうならない方法もあるけど、ただただめんどくさいんだよ。ドラえもんの同人最終回よろしく、人生をかけた努力でもするつもりかい？」

姉は僕を手放した時から変わってしまった。昔だったら女らしさ

を前面に押し出して、僕に媚を売って機嫌をとって。そして時々豹変する。そんな姉だったはずなのに。限りなくドライで、率直で、それゆえに厳しい態度に見えてしまう。といっても今の関係性もそれはそれで、僕が望んでいたものだから、決して悪いことではないけれど、それでも僕は寂しさを感じてしまう。僕は限りなく贅沢な人間だ。別に、だからなんだという話だ。今は妹の名前をどうするかだ。

「じゃあ僕が名前を決めることにするよ。念のため聞くけど、昔の妹の名前はなんだったの？かぶるといけないからね」

「『ああああ』」

「なんて？」

「だから『ああああ』」

小学生のポケモンかよ。そんな名前だったら設定の難易度に関係なく流用なんかしないよ。

「ちなみにその子の名前は？」

僕は黒髪の妹のさしてそう聞いた。

「『あああい』」

「その適当さはなんだよ。このご時世に十字キーで設定でもしてるの!？」

「いや、正直コウちゃんのためだけに作ったわけだから、名前なん

てどうでもよかつたんだ。それにこのご時世とはいっても、当時は10年前だからね。十字キー全盛でタッチパネルなんてなかったんだよ」

「冗談にそこまで突っ込まれても」

「もちろん、私も冗談で返したのさ。私ほどの技術者が、ゲームボ
ーイの十字キーなんて使わないさ。キーボード入力だよ」

「それも冗談だよな？」

「そうだね。実際のところはごく普通に音声入力さ。声紋まで感知して唯一無二の名前になるよ。それを考えたらそもそも、コウちゃん
んの『ああああ』と私の『ああああ』は別物だから、文字だけ見ると流用は可能だよ」

「だからしないよー!」

それにしてもそうだね。名前か。本人と相談できれば気も楽なん
だけど、名前が認証キーとなっている以上はそれもできない。妹の
見た目のイメージから言うところアリスちゃんとかマリアちゃんとかそ
んな少女らしさあふれるネーミングが妥当だと思っけれど。そんな
ありきたりな名前なんてかわいそうだよ。何て言うのが、世にはび
こるキラキラネーム誕生の理由なんだろうね。問題は名前が奇抜な
ことではなく、どうあがいてもそのように読めないことだからね。
読めればそれこそ、溜怒流布ちゃんとかでも本人以外には差し支え
ないだろうし。名前で他人に迷惑かけるって、存在否定そのものみ
たいで、そんな名前を付けた親の常識を疑ってしまうね。それでも
考えてつけてるだけ『ああああ』なんかよりだいぶましだけど。ま
あここはあれだね。某国の文化を見習って候補二つをごちゃ混ぜに

すればいい。という訳で名前はアリサにしよう。やっぱり4000年の歴史はだてじゃないね。一瞬で名前が決まってしまった。本格的にもれなく混ぜると、語呂がいいのはマリスになってしまったのだけれど、それはちょっとね。そこまでの攻撃力は求めてないし。でもアリサってなんかありきたりだよな。何かありがち過ぎてもつと気をてらいたくなってしまふ。何というあまのじゃく。とはいえなにも思いつかないのでここは安易にひっくり返してサリアにでもしておこう。そんな名前ほとんど聞いたこともないし、語呂もそれなりに悪くないからね。という訳でお待ちかねがついにやってきたわけだね。テンションが上がりすぎて涙が出てきた。

「という訳で名前はサリアに決めました」

「そうかい。それは良かった」

「お兄ちゃん、素敵な名前をありがとう。大事に使うね」

サリアはそう言って布団の中で僕に抱きついてきた。超うれしい。

「ちょっと待って。僕はまだ、ベロチューどころか唇に触れてさえいないんだけど」

「ああ、それならさつきあああいが採取済みの君の体液を彼女に認識させた後、きみの『という訳で名前はサリアに決めました』で再起動が成功したんだよ、体液の認識さえすれば別に直接本人が摂取させる必要はないからね。ちなみに私の技術力は世界一だからね。君の言葉から名前だけを割り出し認識させること造作もないんだよ。しかしまったく、女の嫉妬は怖いものだ」

黒髪の妹はしてやったりとニヤニヤしている。僕は姉の言葉を聞

いて以来、この瞬間を夢見て過ごしていたわけだけれど何故だかひどい虚無感に襲われた。でもまあ、妹が目覚めたのは心から喜ばしい事だよ。

「おはよう、サリア。これからもよろしくね」

第一部・完 的な(後書き)

and
I love you
I will always

同情するなら・・・

姉から離れて暮らすことになって一番困ったのは家事だ。今まで僕は何もしてこなかったのだから当たり前といえばそれまでなのだけども。料理で言うとかップラーメンさえ作れなかったくらいだから家事について僕がどれくらい致命的なのかわかってほしい。僕の人生で持った一番重いものといえば姉からの愛情だけれど、それ以外でいっても箸より重たいものはほとんど持った覚えがない。といっても別に包丁が重くて何も切れません、だとか中華鍋が重すぎてチャーハンが作れないよー、何てほどではなく、腕力だけ見ればそこまでひ弱ではない。ただ味付けの仕方とか火加減だとかそんなのが全然わからない。妹たちに頼もうにも、彼女たちだってそもそも僕の遊び相手として作られたわけだから、家事なんて専門外なのだ。あいちゃん(つていうのはあああいちゃんのことだけど、さすがにかわいそうなので略して適当にそれっぽい名前をでっち上げたのだ)の方は若干の友人宅暮らしのおかげで最低限の家事はできるのだけれど、意外なことにサリアちゃんの方は僕以上に家事に対する常識がない。ついさつきだつてカップめんを使うお湯を沸かすために家中でたき火をしてしまったくらいなのだ。

まあなんていうの？そんな感じの理由で、姉に融通してもらった一軒家が今ものすごい勢いで燃え上がっているんだよね。まったくいい眺めだよ。家じゅうが燃え盛つて火柱が立っている様子は少し早いクリスマスツリーを連想させる。

「あつたかいね」

当のサリアちゃんは今の状況が全く理解できていないようで何の危機感もなさそうだ。10年も一緒に暮らしてきて気付かなかったのもあれだけど、この子は意外と危機管理能力が低いんだよね。いままで生きていくうえでの必要事項は完全に他の創造物に丸投げしてたせいで、完全に生物として必要最小限の野生すら失ってしまっ

ている。さすがに家の中で火を起こしてはいけませんっくらい僕でもわかるよ。

「なにこれ？」

対して野生の塊みたいなあいちゃんは今夜の夕食である野鳥を仕留めて家までもどってきたはいいけれど、このありさまを見てほとんど放心状態だ。

「あ、丁度火があるんだから、今のうちに焼いちゃおうよ」

意外と強引なサリアちゃんは現実から目を逸らしているあいちゃんから鳥をうばいとして燃え盛る炎の中に投げ入れた。そこまでされてもあいちゃんは固まり続けている。確かにシヨツクだけど、そこまでひどく動揺するとは思わなかった。

「サリアちゃん、君はあれを炎に投げ入れて、一体どうするつもりなの？」

「こつするんだよ」

そう言うのと彼女は燃え盛る炎の中に飛び込み、投げ入れた野鳥をさがしあて見事に持ち帰ってきた。しかし、あまりの火力に鳥もサリアちゃんも黒こげだ。

「えへへ、ちゃんとできたでしょ？」

そういつて無邪気に笑う。その笑顔に屈託がなさ過ぎて僕はうなづくことしかできない。

「えらいね。じゃあさっそくたべようか」

ぱつと見黒こげだけど、さすがにあの短時間だと中までこげたりはしてないだろう。

「ちよつと」

ようやく落ち着いたのかあいちゃんがようやく戻ってきた。

「お兄ちゃんたちは、なんでそんなに暢気にしてるのっ！」

あいちゃんに常識があるのは悪い事ではないんだけど、こついう時ほど冷静でいた方が正しい判断をみちびけるんだよ。あいちゃんはその辺が甘いね。いつでも氷のようにクールにいないとね。

「お兄ちゃんはこれからどうするつもりなの？お兄ちゃんは分から

ないかもしれないけど、一軒家っていうのは高級品なんだよ。しかもこれからはお姉ちゃんにだって頼れないし、新しい家買うなんてほとんど不可能なんだよ？家を買うどころかこれから住むところもどうする当てだってないのに。私たちはまだいいんだよ。恒常性に頼ってれば野宿だって何だってできちゃうし。お兄ちゃんはこれからお風呂に入るのだって一苦労だし、眠るときだって常に動物に襲われないか、だとか寒さにたいおうしなきゃいけないんだよ？っていうかその馬鹿妹。どうせこんなことになったのもあなたのせいなんですよ。あなたの能力で炎を消しなさいよ。どうせこの家で暮らすのはもう無理だけど、せめて焼け残った物資くらいはあされるかもしれないし。さっさと消してよ」

「あいちゃん怖いよお」

僕でさえ恐怖を感じるくらい殺意のこもった視線をぶつけられ、怯えたサリアはすぐさま能力を発動させる。といても視線の恐ろしさで言うとサリアの方がよほど恐ろしいけれど。その視線映ったものを消し去ってしまうのだから。そしてその結果、家を覆い尽くしていた炎は見事に消え去った、家ごとね。

同情するなら・・・(後書き)

今度は家探し

料理下手って想像力旺盛なだけだよ

「なんてことしてくれんの?!」

あいちゃんはサリアちゃんを視線だけで射殺さんという剣幕で睨みつけた。

「そんなこと言ったって、炎だけ消すなんて難しいから失敗しちゃったんだよ」

「まあ、だったら仕方ないよね。今度からは能力の訓練でもしようか」

そりゃあこの間までほとんど封印されていた能力なんだから、多少の失敗は仕方がないと思う。失敗したからこそ、訓練しようという発想が出てくるのだ。失敗とはすなわち成長のきっかけなのだから、無下に怒ってはせつかくの芽を摘んでしまうことにもなりかねない。

「ありがとう。お兄ちゃん」

怒鳴ったりしたらこの笑顔も見れないし、相手も怒られなくて済むっていう。いわゆる win-win の関係ってやつだね。

「ほら、あいちゃんも笑ったほうが可愛いよ」

「そ、そうかな?」

そういうと彼女は申し訳程度にはにかんだ。もともと笑う子ではあったけれど、その笑顔にはどこか影があった。そんな彼女がぎこ

ちなくはあるけれど、こんなに屈託のない笑顔を見せてくれるようになったのはつい最近のことで、僕はそれを心底から嬉しく思う。でも心からの笑顔を見せなかった原因は間接的に僕にあるのだから、それに関しては申し訳なく思ってしまう。

「そうだよ、ほら。多分おなかすいてるから気もたってるんだよ。あいちゃんの獲ってきたきた鳥でも食べよう。表面黒こげで見た目は悪いけど、中はそんなに焦げてもないはずだよ」

僕はそう言っただけで表面の炭をそぎ落とした。よし、良く焼けていいにおいだ。僕はそれを切り分けようとしたけれど、そう言えば家財道具も何も燃え尽きてしまったのだった。というか消されてしまった。よくよく考えると確かに、こんな暢気に構えている暇なんてないのかもしれない。仕方がないので僕は素手で肉を引きちぎることにした。

「おにいちゃん、それ以上はやめといた方がいいよ。一応獲つてすぐに絞めて内臓を取り除きはしたけど、それ以外の下処理なんてなにもしてないし、そもそも表面は焦げてるけど中まで火が通り切っていないから、もし食べるとおなか壊しちゃうよ」

「まじですか」

それにしても、あいちゃんがこんなにも常識的なキャラだとは思わなかった。もう少しエキセントリックなところがあるとは思っていたけれど、それは本当に僕の気を引くためだけに行っていたのだと思うと、やっぱり申し訳ない。何とこのだろうか、むしろサリアちゃんのほうがよほどエキセントリックだ。その豪快さははたして元々そうであったのか、それとも最近の生活にストレスがたまっているからなのか。どちらにせよ、10年も暮らしていて彼女のこ

とは何一つ理解できていなかったのだろう。それは兄としては非常に情けない事であり、同時にこれから何とかしなくてはいけないという義務感にも駆られてしまうのだ。サリアちゃんは理解力も応用力もかなりのものだから、教えがいはあるのだから。唯一問題があるとすれば、教える人間が僕だということだけれど、それに関しては姉からもらった資料でなんとかするしかないか。と思ったけれどその資料さえももう消え去ってしまったのだ。本当にどうしようね。

「私一応、この周辺のことを調べてただけど、今日をしのげそうな場所があったんだ」

「すごいね。もうそんなこと調べてたの？」

「住む場所の周辺調査なんて常識だよ？私お兄ちゃんのこれからが心配で仕方がないよ」

「ごもっともだね。そして義妹に詰られるなんて、最高だ。」

料理下手って想像力旺盛なだけだよ（後書き）

今回の後書は長くなりますごめんなさい。読んでもらえるとありがたいです。

まず、一部が終わってちゃんと読み返してみたのですがいろいろ問題があるので全面的に加筆修正しようと思います。

何が問題かって、読んで下さった方なら薄々気づいていると思いますが、この小説は全くの行き当たりばったりで書かれており、しかもわりと重要だと思われるエピソードさえも長くかかりそうでもんどくさいという理由ではぶいたりしてます。結果次の話を書いても色々矛盾点だとか理解できない話をされたりという訳のわからないことになるでしょう。

そんな感じの理由で加筆修正したいのですが、読んで下さった方から感想や指摘をいただければ非常にありがたいです。とても参考になります。

ちなみにまともに書けば多分文字数で言うところ3倍くらいになりそうなのですが暇だったら読んでみてくださいください。

ジャンプアニメのオリジナル展開って主人公が成長できないからつまらないよわ

あいちゃんの案内でたどり着いたのはとても大きな家だった。それも10人やそこらでは住みきれないだろう。いわゆるお屋敷だとかそんな感じで、日が沈んで明りなんてほとんどないのにきらびやかな印象を受けてしまう。あいちゃんはどうやらここに泊まれると期待しているらしい。

「すみません、一晩と言わず泊めていただきたいのですがよろしいでしょうか？」

僕はインターホンを鳴らしそう聞いたのだ。そしたら執事だと思われる人はやたら懇篤な口調で少々お待ち下さいといって長いこと僕たちを待たせ続けている。もう10分は無駄に広い玄関の前で待っているのに何の音沙汰もない。もしかして寝る場所もないくらいに人でいっぱいなのかもしれない。だったらさっさと断ってくれた方が手の打ちようもあるのだけれど、いい加減寒くて仕方ない。僕はまだいいにしてもサリアちゃんは凍えているようで真っ青になっている。こういう時こそ兄としてすべきことがあるだろう。

「サリアちゃん、こっちおいで」

彼女は僕の言葉に素直に従ってそばに寄ってきた。これから何をされるとも知らずにね。

「お兄ちゃん、だめだよ、そんなことしないでっ」

「どうして？正直言って気持ちいいんですよ」

「気持ちよくなんて、ないよ」

「そうなの？僕は寒い中を厚着して温まるの好きなんだけどな」

文明を用いて自然に逆らうのは独特の征服感があつて病みつきになつてしまうのだ。兄妹なんだしそんな感覚も共有できるのかなと思つたけれど妹はあまりお気に召さなかつたようだ。なんかさみしいね。

「お兄ちゃん寒そうだもん。」

妹が半泣きで僕の半裸姿をのぞきこんでくるけれど、まあ確かに寒い。しかしおそらく、妹が想像しているよりかは暖かいはずだ。なぜなら僕は今妹に裸を見られ興奮し体が火照っているのだから。あいちちゃんの目線など、僕を完全に軽蔑しきっている。僕のことを傷かつてそんな目をしてきているのだろうね。僕は本当に兄としてこれ以上ないくらいに幸せだ。

「あの人に能力を封じられてからだんだんお兄ちゃんのことがか分からなくなってきたよ。心を読めるって本当に便利だつたんだね」

そうなのか。その軽蔑の目線は僕を興奮させて体を温めさせるためとかじゃなく、単純に蔑むためのものだったのか。それはそれでそれだからこそありだ。むしろ気づかひによつて生まれる蔑みの目線などそれはただの心配だ。だけど妹が僕を心底から蔑むことはおそらくないだろうという予測から僕は疑似的な蔑みで満足したふりをしていただけなのだ。貧乏人がこれはこれで幸せだよ、何て言うのと同じで、そう思うことによつて自分を納得させていたにすぎないのだ。だからこそ僕は今本気で妹に軽蔑されているという事実を、恐ろしいほどの興奮を覚える。

「ありがとう」

僕はあいちゃんにお礼を言った。すると愛ちゃんの目つきはさらに変化した。今度はかわいそうな人を見る目つきだ。蔑みとは一味違う、完全な上から目線での同情。すごくいい、のだけれどさすがに僕だって兄としての最低限の威厳くらいは保っておきたい。

「さて、茶番は終わりだ。これからが本番だよ」

ようやくインターホンから返事が来たので妹から服をはぎ取った。や、と短く声をあげた妹のおかげで軽くお代官様気分を味わえてしまった。ありがとう、そしてあり。返事によるとこの家の主人は客を止めることに反対はしてないそうなのだが、一人娘がどうやら他人を自分の屋敷に泊めることをえらく渋っているようだ。妥協案としてその一人娘に一目会わせてもらって、その上で彼女が僕たちを止める許可を出すかどうか決めるらしい。主人を差し置いてそんな権限をもつなんて、一体どんなわがまま娘なのだろう。

ジャンプアニメのオリジナル展開って主人公が成長できないからつまらないよ
書きなおしつもらないのでやっぱり進めます

自分のためになるなら倫理観を無視したクローン技術にも大賛成

僕は屋敷の中に入ろうとしたのだけれど、のっぺりとした白い飾り気のかけらもない面をかぶった執事に、それと同じお面を渡された。どうやらそれをつけなければ敷居をまたがせてもらえないらしい。妹たちは何も渡されていないあたり、ここでは男女差別がまかり通っているのだろう。と思ったけれどメイドらしき人も同じく仮面をかぶっているのだ。まったくもって何を目的としているのか分からない。妹たちは何故だかそわそわと落ち着かない様子だ。そう言えば彼女らは、他人の家にお邪魔したことなんてほとんどなかったのだから、それは無理もない事なのかもしれない。サリアちゃんに至っては僕の知る限り初めての体験だと思う。

「お兄ちゃん、気が付かない？」

「何に？」

「ならいいんだけど、なんか変な感じがしたから」

あいちゃんはしきりに辺りを気にしている。一体なんだろう。これといって気になる点といえば、廊下全体に敷き詰められた絨毯を土足で歩いててもよいのだろうか、といった庶民じみた感想くらいのものだ。僕だって仮にも支配者階級になりあがったのだからそんな貧乏くさい価値観はどうにか払しょくすべきなのだろうけれど、わりと質実剛健な姉の美意識のもと育った僕では不可能なのかもしれない。姉の支配者としての実力は折り紙つきであると友人は事あるごとに恐れ多い口調で話していたことはあるけれど、住んでいた家はこんなに広くはなかった。実力と財力は全くの別物であるということなのか、それとも姉は家の大小などを気にしないたちだったの

か。

「こちらでございませす」

仮面の下からくぐもった声でそう告げられる。僕は仮面の僅かなスリットからその部屋の扉を見たけれど、正直理解できなかった。何故だか、ろうそくで照らされたその扉はショッキングピンクに彩られていたし、表面の彫り物からドアノブに至るまで何から何までファンシーで直視すれば即死でもしそうなほど男を拒絶していた。この仮面に視界をほとんど遮るほどのスリットの狭さは客人の精神衛生を守るためのものなかもしれない。だとすれば可愛いもの大好き盛りの妹たちが仮面を強要されなかった理由も何となく察しが付くというものだ。まあなにせよ、この扉の奥に控えるお嬢様はまともな人物でない事だけは確かだ。僕は覚悟を決めて開かれた扉の向こうに足を踏み入れた。

「ふむ、確かにこ奴らは私の視界に入っても問題はないだろう。お前の女に対する審美眼はこれからも信頼してやるとしようか」

ありがとうございます、と恭しく頭を下げる使用人である。僕はほとんど視界の遮られた状態で尊大なお嬢様を見ようとしたけれど、霧がかかったように何も見通せない。

「しかし男に対する評価に関しては、お前は甘い。この間のくずなど醜すぎて、心の準備なくしてしまっただせいで目が腐り落ちるかと思っただわ」

「申し訳ありませんでした」

「私は寛大なのだ。過ぎたことをいちいち指摘などすまい。たしか、

「この奴の素性はお姉さまの作り物であつたな。だとすればそれほどひどい見た目でもあるまい。その妹たちよ、貴様らの兄は美しいか」

「どうだろう」

「わかんない」

ひどいよ。

「ごめんね、お兄ちゃん。だけど私はお兄ちゃん以外誰にも興味ないから、例えお兄ちゃんが世界一醜くてもかまわないんだよ。お兄ちゃんがお兄ちゃんですえあれば私はそれだけで十分なんだよ」

「私はね、お兄ちゃんのこときれいだと思うよ。だけど私お兄ちゃんとお姉ちゃんといちちゃんしか知らないから、知らない人にきれいかどうかなんて教えられないよ。あの人にとって、もしお兄ちゃんが醜かったりしてあの人目が腐り落ちちゃったら悪いし」

まあ確かに比較対象がないからこそ、僕の美醜に関する評価がでないというのは分かった。妹たちからの評価に落ち込むこともないのだろう。それにしても、いくら僕たちの立場がしただからと言って、ここまで尊大な態度をとられては結構腹が立ってしまう。

「まあよい。顔を見せんか」

もし醜いから帰れ、なんて言われても困ってしまうので一瞬仮面を外すのを躊躇ってしまった。けれど仮に僕の顔が醜かったとしても、それはそれでこの失礼なお嬢様に対して一矢報いることができるのだ。僕は一気に仮面を外してお嬢様を睨みつけた。けれどやはり彼女は靄がかかったように白くかすんで見える。どうやら視界の狭さ

が問題ではなかったようだ。もしかすると何かしらの能力を使われているのかもしれない。だとしても、この地域は僕の支配領域内なのだから、その程度の能力は無効化してしまえてもおかしくはないのだけれど。視界を遮っている能力者が相当の力を持っているか、僕の力が相当弱いかのどちらかだろう。僕は意識を集中して靄を振り払うイメージを頭に作り上げる。支配領域内では本来の能力のほかにイメージによって現実を改変できるのだ。ただしそれには相当の訓練が必要で、僕程度の初心者であればせいぜい自分の能力に軽く応用性を上乘せる程度のことしかできない。この時僕は拒絶の能力を媒介にして靄を消したのだ。姉からのレクチャーによれば最初はそのような関連付けから始めていくと、自分の能力を離れ、いずれは支配領域内では万能性を持てるらしい。現時点では全く想像もつかない高みなのだけれど。何にしても、今回はそれらがうまくいったらしい。靄の向こう側にははつきりとお嬢様の姿が見えた。純白のロリータ調ファッションに身を包んだ彼女はイメージ通り不機嫌そうに、王族が使っていきそうな大がかりな椅子に構えていた。問題はその顔がお姉ちゃんにしか見えないことなんだよね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9410w/>

こんな妹がいたら人生捗るよね

2011年10月28日13時33分発行